

公開シンポジウム

和歌山城と 下町の風景

発表資料集



開催にあたって

和歌山城は江戸幕府御三家である紀州徳川家の居城であり、その周辺地域は紀州 55 万 5 千石の城下町として栄えました。

近年、和歌山城二の丸御殿や三の丸武家屋敷、城下の鷺森御坊周辺地などの発掘調査が増え、和歌山城と城下町に関する多くの資料が蓄積されてきております。

このたびのシンポジウムでは、これら発掘調査の成果からだけでなく、絵図・文献等の史料も紐解きながら、江戸時代の和歌山城と城下町の風景について考えていきたいと思っております。

最後になりましたが、このシンポジウムを開催するにあたり、ご参加くださった会場のみなさまはもとより、ご協力をいただきました多くの機関、関係者のみなさまに深く感謝の意を表します。

平成 27 年 3 月 8 日

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 工 楽 善 通

公開シンポジウム 和歌山城と城下町の風景

【開催日程・資料集目次】

日 時 平成27年3月8日(日) 10:30~16:30
場 所 イオンモール和歌山 3F イオンホール

開会あいさつ

記念講演

10:30~11:00 「織豊期城下町の出現と展開」 1
大阪歴史博物館 研究主幹 松尾信裕 氏

報 告

11:30~11:50 「和歌山城の内と外—和歌山城下の基礎知識」 7
和歌山県文化財センター 高橋智也

<昼 休 憩>

12:50~13:20 「名所図会にみる和歌山城・城下町の風景」 9
和歌山市立博物館 額田雅裕 氏

13:20~13:50 「紀州藩主屋敷の景観—二の丸大奥の発掘調査成果から—」 13
和歌山市文化スポーツ振興財団 北野隆亮 氏

13:50~14:10 「紀州藩主屋敷の景観—文献にみる二之丸大奥の穴蔵について—」 19
和歌山市立博物館 高橋克伸 氏

<休 憩>

14:20~14:50 「遺跡にみる三の丸武家屋敷の風景」 23
和歌山県文化財センター 丹野 拓

14:50~15:20 「鷲森御坊・寺内の成立と和歌山城下町の形成
—鷲ノ森遺跡の発掘調査成果から—」 27
和歌山市文化スポーツ振興財団 西村 歩 氏・井馬好英 氏

<休 憩>

パネルディスカッション

15:30~16:30 「和歌山城と城下町の風景」

コーディネーター 和歌山県文化財センター 高橋智也

参考資料 33

閉会あいさつ

主 催 公益財団法人 和歌山県文化財センター
後 援 和歌山県教育委員会 和歌山市教育委員会
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団
一般社団法人 和歌山県文化財研究会

Memo

織豊期城下町の出現と展開

大阪歴史博物館 松尾 信裕

要旨

織田信長が建設した城下町と、信長を継承した豊臣秀吉が建設した城下町の構造をたどり、秀吉の義弟になる秀長や子飼いの大名である浅野幸長が建設した和歌山城下町の構造を検討する。

和歌山は天正13年（1585）に秀長によって築城されたのが始まりで、その位置付けは秀吉の紀伊支配の本拠地であった。秀長は桑山重晴を城代として配置した。その後、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦後、浅野幸長が入国。これ以降に城下町の整備が進んだと考えられている。現在の城下町の姿はこの時に出現した姿を継承している。

和歌山城下町の街区構造を天正期や慶長期の秀吉の城下町、特に大坂と比較検討してみる。

1. 織豊期の城下町

織田信長や豊臣秀吉が天下人として活躍した時代に建設された城下町をいう。

織田信長の城下町

小牧山城下町：永禄6年（1563）に建設され、同10年（1567）に信長が岐阜に移るまで存続した。標高約90m、麓からの比高が約70mの小牧山山頂に本丸を設け、山腹に多くの曲輪を巡らす。居館は山麓に置き、武家屋敷地は城の周囲と城下の東に配置した。

町人地は武家地の西側に配置し、城に向かって延びる道路に間口を開く竪町型の城下町であった。明治17年の地籍図から当時の町の姿がわかる。

道路は並行・直交しており、計画的に建設されている。竪町型の両側町。

安土城下町：天正4年（1578）、標高約200m、比高約100mの安土山山頂に天守を築く。

城下は安土山西麓にある微高地に建設しており、城下町北部に武家地、南部に町人地を配置している。

町人地は武家地南部の微高地上と旧集落を含めた範囲。旧集落の港湾機能を取り込んでいる。

町人地が広がる微高地上には明治期の地籍図では短冊型地割は見いだせない。

豊臣秀吉段階の城下町

秀吉が建設した城下町が基本スタイル。

内陸から水陸交通の結節点となる流通の便が良い平野部に進出。港を包括するか近接する。城郭は城下を見下ろす（城下から見える）平山城や平城。身分別居住空間の設定。

長浜城下町：天正2年（1574）、小谷城を捨て琵琶湖に面する長浜に城郭と城下町を建設。武家地は外堀内に配置し、堀外に竪町型の町人地を配置。

大坂城下町：天正11年（1583）、築城開始。同時に初期城下町の建設。

その後天正14年に二ノ丸、文禄3年（1594）に惣構。この間に初期の町人地が拡大。

慶長3年（1598）に三の丸の増設。惣構の外に新規の町人地の建設。

その後、慶長20年までに南に拡張。

大坂城下町は出現以降、4回の拡張工事による街区が広がる。

武家地は城の周囲に配置し、町人地はその外に置く。城に向かって延びる道路に面する豎町。

近江八幡城下町：天正13年（1585）、秀吉の甥の秀次が建設。八幡山城に城郭を築き、その裾部に武家屋敷を置く。町人地は堀の外に豎町を建設。

水口岡山城下町：天正13年（1585）、秀吉家臣の中村一氏が東海道を押えるため築城。

天正18年（1590）から増田長盛、文禄4年（1595）からは長東正家が城主。

南側の山麓に武家地。その南に町人地。武家地と町人地は堀で区分。

東海道を並行する2条の道を敷設し、3条の道からなる町人地を建設。横町型。

伏見城下町：文禄元年（1592）、隠居所を伏見の指月の岡に築く。慶長元年（1596）の地震で崩壊。

直後から木幡山に築城開始。指月城の城下町は城郭の西にある湊付近に建設。豎町。木幡山城下町は東の丘陵状に城郭を置き、その西斜面に大名屋敷を配置。町人地は武家屋敷の西に城下町を南北に縦断する奈良街道に沿って延びる横町型。

初めて横町型の町人地が出現。「日本の城下町史上の大転換と評価できる」[足利健亮1984]。

和歌山城は天正13年に築城で、上記の城下町と同時期。ただ、その時の構造は不明。

慶長期の城下町

秀吉子飼いの大名や徳川系大名が建設

秀吉亡き後、各地で城下町が建設される。

東軍に加担した大名が増え新領国に移封される。この頃より日本各地で築城ブーム。

和歌山城下町は天正期の姿が不明。

浅野期に整備されたとすれば慶長期の城下町が参考になる。

彦根城下町：慶長9年（1604）から築城。同11年にはほぼ完成。石田三成の佐和山城を廃城にしてその代わりに築城。標高136mの金亀山山頂に天守を築く平山城。

内堀・中堀内は本丸・二ノ丸、二ノ丸に上級家臣。中堀と外堀の間に中級家臣屋敷と町人地。町屋は城の南東部と南西部にあり、城に並行する道路に面した横町型。

南東部の町人地は1条の街道に面した街村状町人地で、南西部の町人地が2条の道路が並行して町屋が建ち並んでおり、こちらが中心街。

城の京橋口から出る道路だけが豎町型となる。

篠山城下町：慶長14年（1609）、中四国20大名による天下普請として築城工事着手。

比高15mの笹山を利用して築かれた平山城。内堀内に本丸・二ノ丸、内堀と外堀の間の三ノ丸には上級家臣屋敷。武家地を囲むように街道が敷設され、街道に沿って町人地がある。

町人地は慶長15年から建設され、八上城下から町人を移住させる。

町人地は街道に面した両側町で、横町型となっている。

松江城下町：慶長12年（1607）着手、慶長16年完成。これと同時に城下町の建設に着手。

標高28mの亀田山山頂に天守を築く。内堀内は城郭、中堀内は武家地。内堀の外側に中級家臣屋敷が堀の四周に配置される。

町人地は中世集落があった所に両側町を建設。南中堀に面する末次地区は堀に並行する横町型。大橋川を南に越えた白濁地区は山陰道から入ってくる街道に面する。白濁地区は豎町型に見えるが、城下に入る道路に面したことでこの形になったのではないか。

2. 和歌山城下町の形成

築城以前

古代には和歌山城下町が立地する吹上の東側を流れていた紀ノ川は、戦国期までに吹上砂州を突き破り、水軒川に沿うように南流し雑賀山の北に河口ができた[日下雅義 1979・1991]。和歌山城は岡北端の山塊に築かれ、城下町は吹上砂丘上に建設された。

紀ノ川河口の広い平野部の微高地に位置する。

紀ノ川に港湾施設。古代以来、紀ノ川河口には港湾機能が存在していた。

本願寺が移転した後の鷺の森御坊や湊の集落を取り込んで城下を建設。

鷺の森御坊が城下町の町割と同化せず方位の違う街区として残っている[三尾功 1999・水田義一 2003]ことから、町立てするにあたって鷺の森御坊に新しい街区建設を命じていない。

北新町と旅籠町の斜行する道路も鷺の森御坊への道路が残ったものとする[水田 2003]。

この道路は城下町建設以前からの道路で、鷺の森御坊へ通じる道路と推定。

鷺の森御坊への交通路は北東部の紀ノ川南岸の堤防方面に続いていた可能性がある。

桑山期和歌山城下町

天正 13 年 (1585)、羽柴秀吉による紀州攻め後、秀長に築城を命じる。秀長は大和郡山の在城したため、桑山重晴を城代として配置。在府 15 年。

この時期の大手は広瀬方面にあった。城の南東方向。

広瀬口の大橋の東には太田や日前宮があり、それらを通って東へ行く道路に通じる。

この時期の城下町建設に関する記録がないので、桑山が城代であるために思い切った城下町経営はできなかった[三尾 1999]。

桑山期は城の北に鷺の森御坊が存在し、南に雑賀、東に城下町として広瀬があった。

鷺の森御坊の勢力は弱体化し、雑賀や太田も解体され、小規模の町屋が存在する程度か。

広瀬は大橋に向かう道路に面する堅町であった可能性がある。

和歌山と田辺・新宮の城下町を分析した水田は、豊臣期の城下プランは見いだせず浅野期になって建設した街区が今に残っているとした[水田 2003]。

浅野期和歌山城下町

浅野期の町人地の街区は奥行き 17 間と 15 間の 2 種類が基準と分析された[水田 2003]。

慶長 5 年 (1600)、関ヶ原の戦いの後に浅野幸長が入国。在府 19 年。

大手を現在の位置に変える。この時に本町・内町を建設。

「今の大手口、本一町目辺は芦原にて有之候処、其後段々町屋続候由。大坂御陣之時迄者、いまた広瀬口大手に而有之と也。古人の物語記し置。」(『長泰年譜』二 宝暦 4 年 (1762))

浅野家の記録には城下町建設に関する記録が見えないが、19 年間に何もしなかったとは考えられず、城郭や城下町の建設整備が進んだと推定[三尾 1999]。

本町通りが大手への道となり、紀ノ川南岸にあった道路が城下への街道となった。

元和 5 年 (1619)、徳川頼宣が入国。

浅野期の城下町プランを継承して、城下町が拡大。

北と西には紀ノ川と水軒川、東には和歌川が流れ、南は吹上砂丘の南に和歌川が流れ、城下の取り囲む天然の外堀となる。

3. 大坂と和歌山

城郭は平山城で、本丸・二ノ丸は城郭と有力家臣の屋敷。三ノ丸は武家地。
大坂では本願寺を城郭とし、和歌山では御坊が低地であったためか隣接する山塊に築城。
両地とも築城までは本願寺勢力の寺内町があり、地域の拠点として繁栄していた。
本願寺勢力が敗北し、その地を勝利者である織田や羽柴（豊臣）が城下町とした。
大坂は天満の開発に本願寺を呼び戻す。しかし、土塁や堀の設置は認めず。
和歌山は寺内町の構造を残したまま城下町に取り込む。
城下町の繁栄策として中世集落の町および住人を取り込んだ。
大坂は寺内町が鷺の森に移転したが、町人全員が鷺の森に移転したとは考えられない。
大坂寺内町の住人を初期町人地に居住させていた可能性がある。
町人地は三ノ丸の外。天正 11 年建設の大坂は豎町型の町人地。
町人地の奥行きは 20 間が基本。天正期に拡張した街区に奥行き 15 間がある。
秀吉段階にすでに身分別の居住空間が施工されていた。
大坂は秀吉の権勢の拡大に伴って城下が拡大し、和歌山も桑山期、浅野期、徳川期と拡大。
大坂は築城後、慶長 20 年までの 32 年間に 4 回拡張するが、拡張した町人地も豎町型。
大坂城下を中心にした経済圏の中心地であったために、豎町型で継続できた。
信長段階の城下町は領国経済の核であったため、小規模でも豎町の城下となった。
街道を掌握するために出現した城下は街道に沿う場合が多く、横町型を採ることが多い。
伏見城下も指月城段階は豎町であるが、木幡山城段階になって横町になった。
和歌山城下町も桑山期は豎町であった可能性がある。
大坂の町人地は四天王寺門前町・渡辺津といった中世末に繁栄していた町場を取り込む。
繁栄していた町場と城を新しい町人地で繋ぐ。
京街道となる島町・土佐堀通りと四天王寺門前町への平野町の二方向の町人地が中心。
和歌山の桑山期には日前宮や太田、鷺の森御坊周囲に町場があった？紀伊の核。
浅野期以降には徳川幕藩体制に組み込まれ、江戸や大坂を核とする城下町網の一つとなる。
大手となる本町通りは流通網としての紀州街道の一部。
大手通りに接して和歌山城下の生活を支える職商人が集住する内町がある。
出現期、両者は規模の差はあったが経済や支配の中心核であった。しかし、家康が台頭する
慶長期以降、和歌山は江戸を中心にした地方城下町の一つとなり、大坂は台所となった。

参考文献

- 足利健亮 1984、『中近世都市の歴史地理』、地人書房
- 日下雅義 1979、「紀伊湊と吹上浜」『和歌山の研究』第 1 巻、清文堂
- 日下雅義 1991、「消費の場を復原する」『古代景観の復原』、中央公論社
- 篠山町教育委員会 1989、『篠山町内遺跡詳細分布調査報告書』
- 仁木宏・松尾信裕編 2008、『信長の城下町』、高志書院
- 三尾 功 1994、『近世都市和歌山の研究』、思文閣
- 三尾 功 1999、「城下町和歌山の形成—ヴィスタによる都市計画—」『和歌山市立博物館研究紀要』14
- 水田義一 2003、「浅野期紀州藩の城下町プラン—和歌山、田辺、新宮—」『和歌山地理』第 23 号

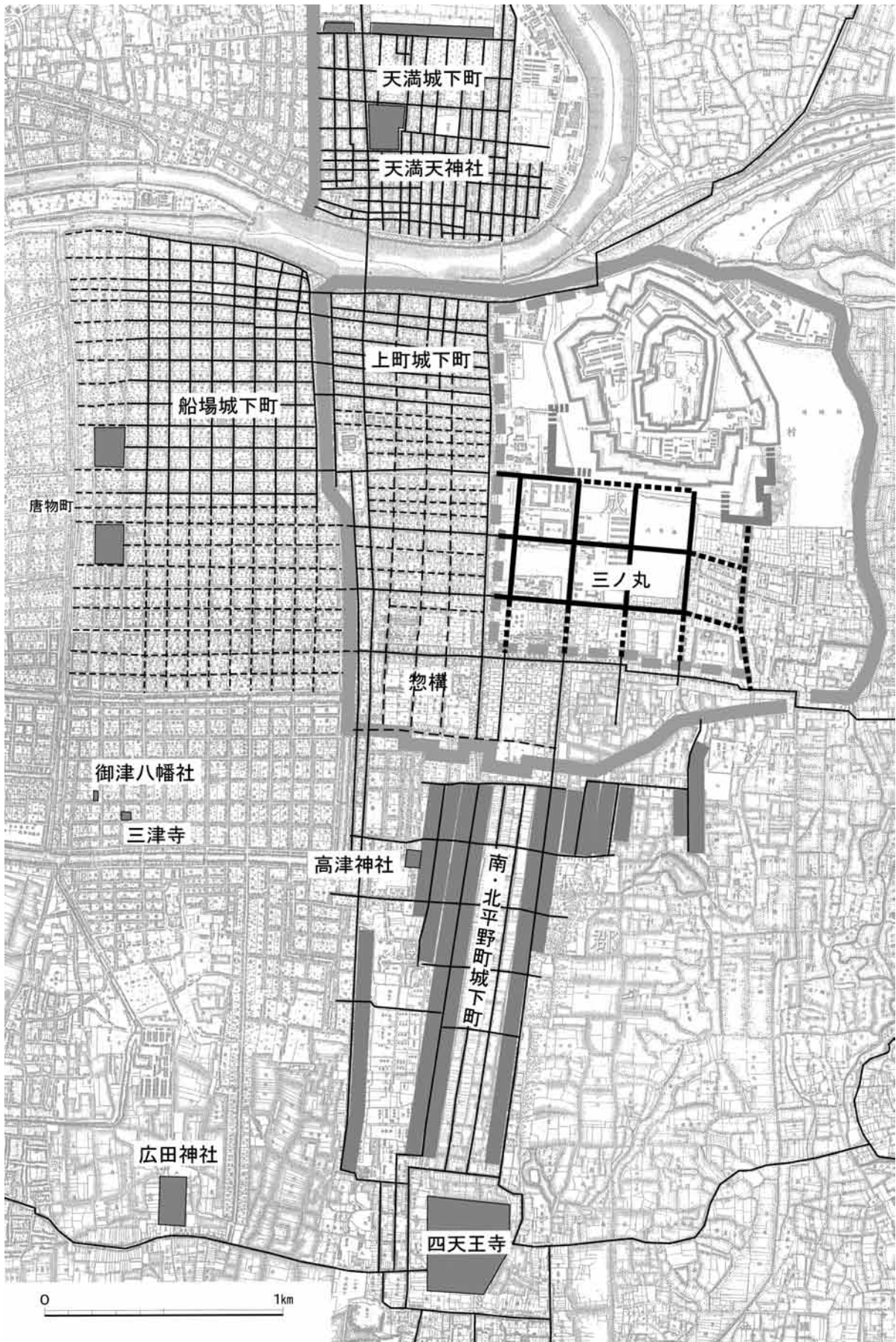


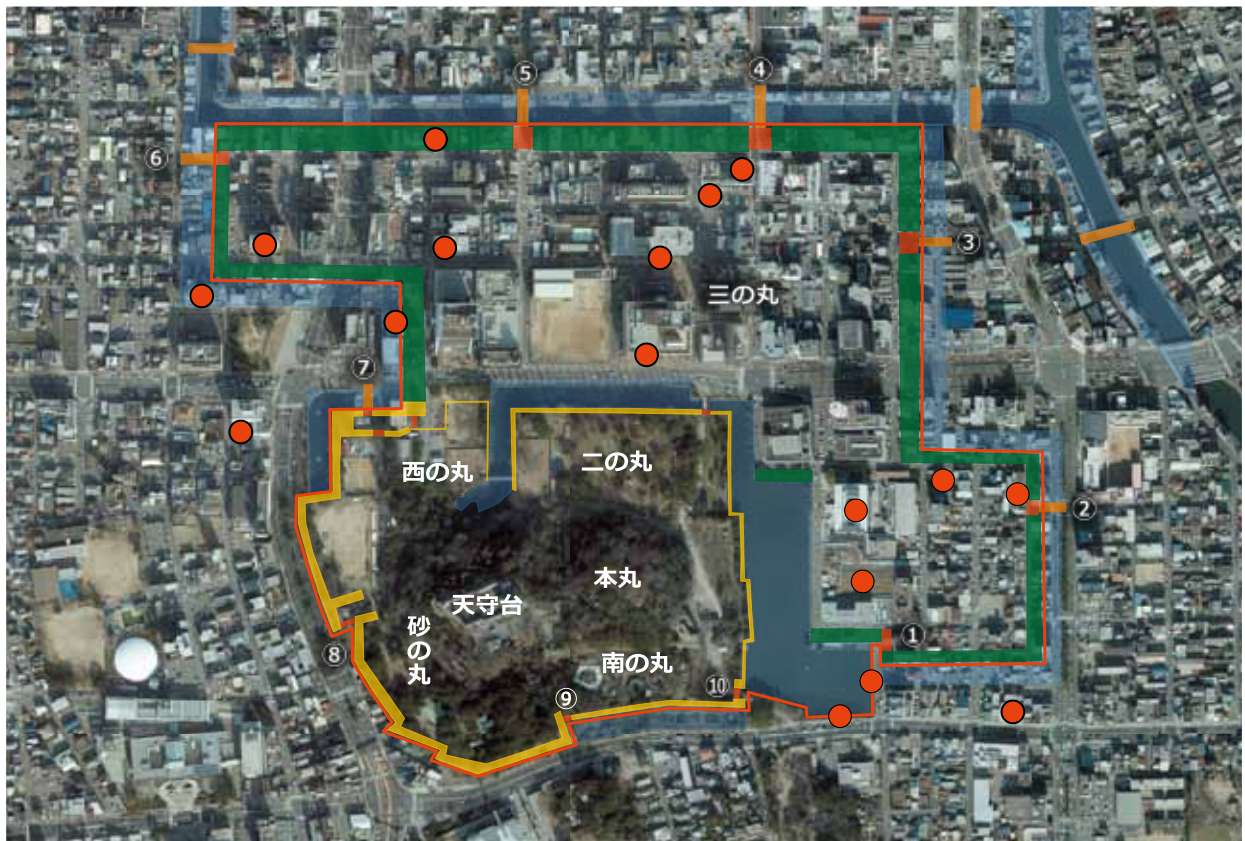
图1 豊臣後期大坂城下町推定復元図（松尾作図）

和歌山城の内と外

— 和歌山城下の基礎知識 —

公益財団法人 和歌山県文化財センター 高橋 智也

「公開シンポジウム 和歌山城と城下町の風景」では、和歌山城と城下町にはかつてどのような風景が広がっていたのかを考える。次からの報告では、紀州藩主屋敷・三の丸武家屋敷・城下町にわけて、遺跡・絵図・文献の最新調査成果が報告され、これらを受けて討論を予定しているが、これらの報告・討論を聞いていただくための予備知識として、和歌山城の内と外について考えながら、和歌山城と城下町の歴史を振り返っておきたい。



航空写真 和歌山市提供

図1 和歌山城の範囲 0 1/8500 500m

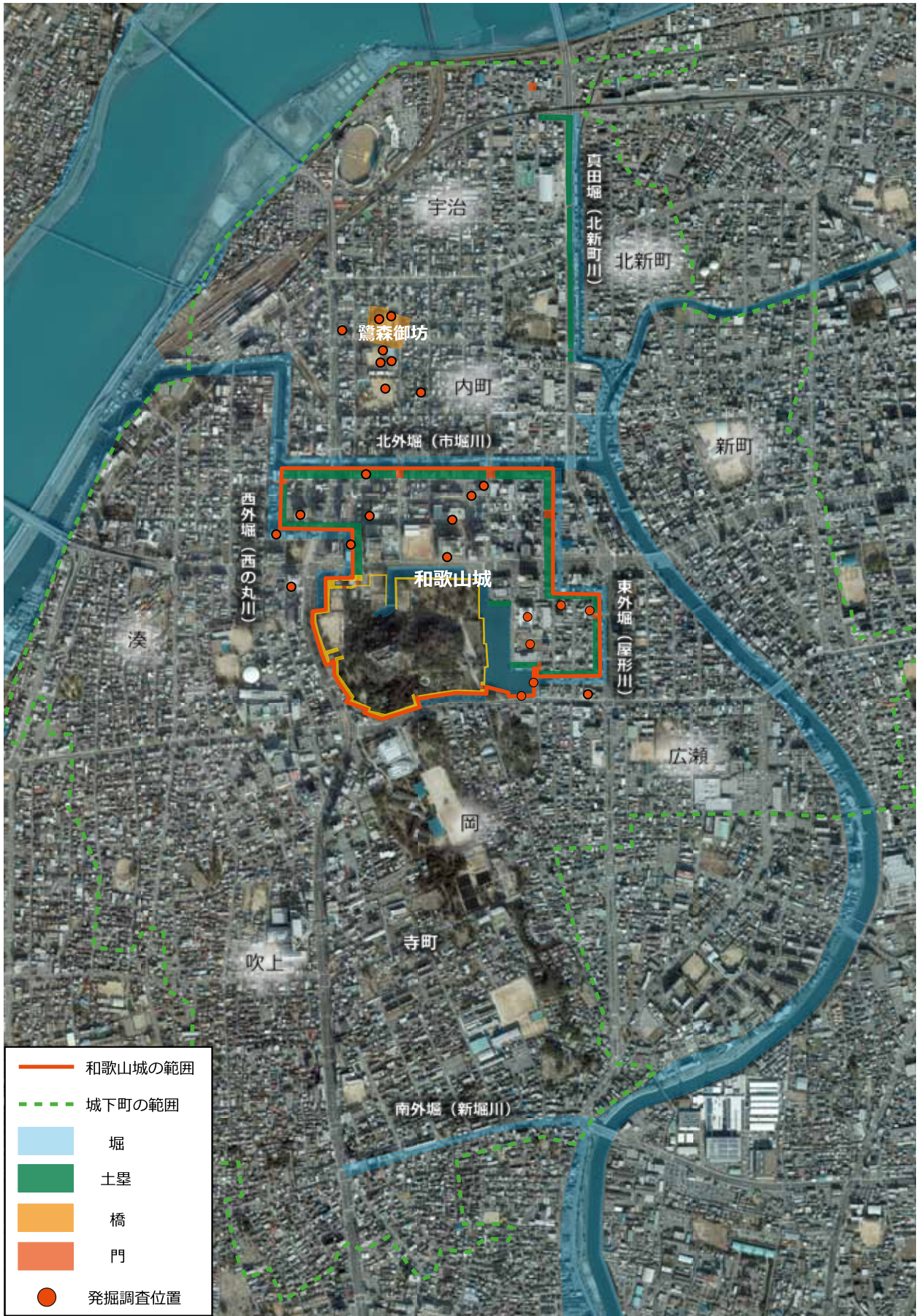
	門	橋	堀
①	広瀬口門	—	東外堀
②	東中橋門	東中橋	
③	三木町橋門	三木町橋	北外堀 (※)
④	京橋御門	京橋 (※)	
⑤	北中橋門	中橋 (※)	西外堀
⑥	湊橋門	湊橋	
⑦	吹上門	吹上口橋	—
⑧	追廻門 (※)	—	
⑨	不明門		
⑩	岡口門 (※)	—	—
(※) 現存			

表1 和歌山城と城下町を区分する門・橋・堀



額田雅裕『城下町の風景―カワラで読む『和歌山名所図会』より転載』

図2 城下町範囲と大名



航空写真
和歌山市提供

図3 和歌山城と城下町の範囲

0 1/16,000 1 km

名所図会にみる和歌山城・城下町の風景

和歌山市立博物館 額田 雅裕

1. はじめに

筆者は、これまでに様々な時代の景観復原を試みてきた。そうしたなかで、近世城下町の景観復原を行うには、どのような復原の方法が有効かを検討してみたい。

2. 景観復原の方法

復原の方法には、過去の景観を直接的に復原する方法と、現在から過去へ遡っていく間接的方法に大別される（図1）。

筆者は、これまで主に縄文時代から中世までの環境や景観の復原を直接的な方法と間接的な方法のそれぞれの長所を活かして行ってきた。近世の景観復原は、先・原史時代のような遠い過去とは異なり、比較的近い過去であるため、直接的に当時の景観へ遡ることができる古文書・古地図といった

時代	新 世			約 10000年前まで		更 新 世
	歴 史 時代	原 史 時代	先 史 時代	先 史 時代		
近現代 100年前まで	約1300年前まで	約2300年前まで				
手段と方法	微地形観察	古文書・古地図	遺構・遺物			
	空中写真		放射性炭素			
	地形図・地籍図		フォト・バルム			
	ボーリング探査・ハンドボー					
	ボーリング資料					花粉

図1 復原の方法（日下雅義 1988 を一部改変）

た歴史資料が豊富にあり、それを考察することによって景観を復原することができる。そして、古地図・古地図といった直接的な方法と、比較的近い過去であることから、現景観から近世の景観を直接的に推定することが可能と考えられる。

城下町は、城郭を中心として成立した都市で、武家屋敷地・町人町などからなっている。城下町和歌山には、その町割を示した絵図や名所旧跡の絵を交えて城下町の案内図を掲載した『紀伊国名所図会』¹⁾（以下、『名所図会』と略す）が残されている。筆者はそれらの古地図・古地図の絵に着彩して読み解き、当時の城下町の景観を把握することを試みた。

和歌山城下町は、①市街地の大半が戦災で焼失し、古い町並みや建造物はほとんど残っていないが、②城下町の町割（土地区画・街路網）や地名がよく残っており、町全体が史跡・文化財的価値があり、城下町の景観をイメージしやすいという利点がある。したがって、和歌山は城下町の景観復原のために必要な場所の特定が容易にでき、現景観に城下町絵図や『名所図会』の景観を位置づけることにより比較的容易に景観復原が可能である。

本稿では、安政2年（1855）和歌山城下町絵図（和歌山市立博物館所蔵、図2、以下、安政絵図と略す）と『名所図会』の分析と考察を行うこととする。絵図に画かれる景観の分析には葛川絵図研究会の絵図分析の方法を援用した²⁾。

『名所図会』は、絵図と詞書で江戸時代後期の和歌山の地理・歴史・風俗などを記した地誌書である。そのなかには過去の時代の想像図も含まれるが、第1編（文化8年；1811年）と後編（嘉永4年；1851年）の中から城下町の範囲を画いた写実的な風景図・真景図61枚を選定して、その景観を読み解いた（表1）。

3. 安政絵図と『名所図会』を読む

安政絵図の凡例は、絵図の南西隅に示され、全部で9つある。左下から上へ①神社、②御蔵・御作事などの役所、③諸士屋敷、④寺院、⑤御徒町と石垣、⑥同心屋敷、⑦町屋と年貢地の屋敷、⑧川・井・溝、⑨道路である（図2・3）。そのうち、安政絵図に画かれるⅠ自然的景観要素は、山地及び丘陵地、砂州及び砂丘、河川、海がある。

和歌山城下町は、紀ノ川河口部の和歌山平野に位置するため、①山地は和歌山城の立地する虎伏山（48.9m）と御作事所のある弁財天山だけである。②砂州及び砂丘は、和歌山城から南へ続く吹上砂丘とその西側に形成された砂山砂丘が画かれている。③河川は、紀ノ川、和歌川、水軒川と人工河川の市堀川などがみられる。これらは『名所図会』に背景として画かれることはあっても、主要な景観要素としては取り上げられていない。それに対して、④海・湊は『名所図会』に3件ある。

Ⅱ文化的景観要素には、①田畑・緑地・芝地、②道路・堤防・石垣・土塁、③建造物、④池・堀・井溝等がある。

①田畑・緑地・芝地は、田畑が城下町の周辺に画かれているが、緑地・芝地は和歌山城とその南側へ続く吹上砂丘に多い。和歌山城の南側には、扇の芝と松原があり、『名所図会』のなかでは前者が「扇の芝」の絵図に、後者が「堂形の図」の背景に画かれている。

②道路・堤防・石垣・土塁は、道路が安政絵図には黄色で示され、『名所図会』には大手道・和歌道・大和街道・紀三井寺道の主要街道が取り上げられている。堤防は、安政絵図では明確な記号で示されていないが、城下町の北東の嘉家作り付近の大和街道が松並木で表現されるのと北島の渡し（市駅付近）の道路沿いの樹木列が堤防と思われる。

③建造物は、A 神社・B 寺院・C 家屋・D 橋梁・E 城郭が画かれている。『名所図会』では、城下町の名所として寺社を取り上げるものが26件と最も多く、A 神社だけを画くものは5件、B 寺院だけが13件、寺社ともが8件である（表2）。

C 家屋は、町屋、武家屋敷地・徒屋敷地・同心屋敷地、役所に分けられる。(a)町屋は、安政絵図では内町・湊北部・広瀬北部・新町・北新町や新堀・東長町・西長町に沿ってみられ、『名所図会』では9件ある。(b)武家屋敷地は三ノ丸、宇治、広瀬南部、岡、吹上、湊南部に、(c)御徒町は久野丹波守上屋敷西側、城下町南西部と砂山地区にまとまってあり、(d)同心屋敷は湊・砂山・堀止・新堀地区にみられる。武家屋敷地・徒屋敷地・同心屋敷地の絵図は、「堂形の図」に久野丹波守上屋敷、「和歌道より御城を望む図」に中級の武家屋敷地などがあるが、主要な景観要素として画かれているものはない。(e)役所（藩の施設）は御城の周辺に位置し、『名所図会』では凡例にある御蔵・御作事所のほか3件が画かれている。そのほか、城下町



図2 安政2年和歌山城下町絵図（和歌山市立鶴物館所蔵）



図3 同図凡例

には木戸・番所・火の見櫓などがみえる。

D 橋梁は、安政絵図では18箇所のみられる。「京橋御門の外」と「寄合橋」には内川に架かる京橋・寄合橋のほか中橋・伝法橋が画かれている。

E 城郭は、第1編には登場しないが、後編には城下町の各方向から6件に画かれ、「鶴の溪 檜椿の図」は内郭を画く唯一の絵図である。その右側は本来、浅野期に改修された緑色片岩の野面積みの石垣であるが、砂岩の打ち込み剥ぎとみえる急勾配の石垣に画かれている。その原因は、内郭であることから短時間に作成したスケッチをもとに絵師が絵図を仕上げたためと推察される。

④池・堀・井溝・その他水域は和歌山城の堀（内川、新堀川、東・西外堀等）、松原の中の眼鏡池などの池沼、井戸がある。井戸は、安政絵図では渡辺主水屋敷地の東側の腰掛け付近、鷹匠町、下町などに確認できる。

Ⅲ 植生その他は、①樹木、②境界、③文字注記、④祭に分けられる。

①樹木は、著名な松として「根上り松」、「四方の嵐松」、「時鳥松」があげられる。松並木・松原は吹上砂丘や和歌山城の土塁上、大和街道の嘉家作り及び和歌道の高松茶屋付近などに、竹藪は紀ノ川沿いの嘉家作りと北島の渡し付近、三年坂及び吹上砂丘東斜面等にもみられる。

②境界と③文字注記は、安政絵図に記されない。④祭は、『名所図会』に2件が画かれている。

表1 城下町和歌山の景観要素

分類	絵 図 名	大 名	自然景観要素	文化景観要素
I -4	吹上の浜汐干	湊	吹上浜（水軒浜）・紀伊水道・松	潮干狩り
I -4	湊河口	湊	紀ノ川・和泉山脈・紀伊水道・淡路島・四国・中洲・鼠島・青岸	城山（湊城）・湊西河岸・番所
I -4	湊築地の景并に御船蔵の図	湊	鼠島	御船蔵・御舟手役所・御番所・湊御殿
II -1	扇之芝	吹上	松原	扇之芝・高石垣・馬場・流鏑馬・見物客
II -2	和歌道より御城を望む図	吹上		和歌道・吹上武家屋敷・天守閣
II -2	本町御門の外 広小路の図	内町・嘉家作り丁		本町御門・大和街道（伊勢街道）・広小路・茶店・旅籠屋・角兵衛（越後）獅子
II -3-A	車坂稲荷社の図	吹上	車坂・松林	車坂稲荷・朱鳥居
II -3-A	北嶋住吉社・野崎八幡社・狐嶋稲荷社	北島村・福島村	紀ノ川	北島の渡し
II -3-A	伊達社・蛭子社	湊		伊達社・蛭子社（水門吹上神社）
II -3-A	朝極神社	内町	松	鷲森別院・朝極神社・寺内町
II -3-A	新内村 納良瀬	新内村		日宮元七瀬御成所・せんしょうが池
II -3-AB	神明社・万性寺	吹上	砂山砂丘	神明社・万性寺
II -3-AB	井原明神社・宇須神社・丈六寺・高松寺・天正寺	宇須村		宇須井原神社・高松寺・天正寺・和歌道・田畑
II -3-AB	明王院・山王社	今福村	雑賀山	明王院・田畑・水軒村
II -3-AB	安養寺・雄天神・西岸寺	湊		道場町・小野天神
II -3-AB	志磨神社・八幡宮社・猿田彦社・弁財天社・八願寺・大聖寺・阿彌陀寺・法隆寺・妙見寺・観音寺・金毘羅社	中ノ島村・北新町		志磨神社・八幡宮社・猿田彦社・弁財天社・八願寺・大聖寺・阿彌陀寺・法隆寺・妙見寺・観音寺・金毘羅社・中ノ島村
II -3-AB	三部神社・照光院・専養寺・柳の井	内町		宇治神社・専養寺・宇治武家屋敷
II -3-AB	本社住吉社・利益院・本弘寺	内町		住吉神社・本弘寺
II -3-AB	岡の宮・松生院・珊瑚寺	岡	吹上砂丘	刺田彦神社・松生院・珊瑚寺
II -3-B	大智寺・報恩寺・護念寺・大恩寺・養誓寺・三光寺・恵雲寺・本光寺・妙法寺・大泉寺・延寿院	吹上	弁天山・吹上砂丘	大智寺はじめ寺町11ヶ寺・寺町通り
II -3-B	蓮心寺	吹上		蓮心寺・和歌道・寺町通り
II -3-B	感応寺・原見坂・禪林寺・車坂・本久寺・四方嵐・菊本橋・葛輪里	吹上・岡	吹上砂丘・原見坂・もくづ川（和歌川）	感応寺・禪林寺・吹上武家屋敷・葛葉の里
II -3-B	長覚寺	湊		長覚寺（紀州東本願寺）
II -3-B	吹上寺	湊	北山（和泉山脈）	吹上寺
II -3-B	光明院・連理（れんり）松	湊	連理松	光明院
II -3-B	浄福寺・養光寺・観音寺・千寿院	宇治・北新町		元寺町・真田堀
II -3-B	高野寺（でら）	宇治		高野寺・用水路
II -3-B	鷲森御堂 西本願寺	内町		鷲森別院・教応寺・寺内町
II -3-B	鶴丸橋・龍源寺・法蓮寺・萬精院・お伊勢橋・円福院・崇賢寺	新町・北新町	鈴丸川（和歌川）	龍源寺・法蓮寺・萬精院・円福院・崇賢寺・鈴丸橋・伊勢橋
II -3-B	真光寺	新町		真光寺・新中通四町目・新中通
II -3-B	念誓寺・上願寺・光秀寺・宮の檀・大橋・時鳥松・大立寺	広瀬・新町	鈴丸川（和歌川）・岩瀬山地・時鳥（ほととぎす）松	大橋・紺屋橋・大立寺・新通・茶屋
II -3-B	庚申堂・般若院・久成寺・多門	新町	もくづ川（和歌川）・岩瀬山地	熊野道・藤六町（新留丁）・一里塚・庚申堂（幼徳寺）
II -3-C(a)	高松茶屋	関戸村高松		茶屋・和歌道
II -3-C(a)	追手入口傘師	内町		本町九丁目・傘屋20軒・松葉傘（紀州傘）・買い物客
II -3-C(a)	本町五丁目新屋酒店	内町		本町五丁目・造酒屋（新屋酒店）・9月9日新酒販売
II -3-C(a)	新屋にて粕漬を製する図	内町		造酒屋（新屋酒店）・粕漬（新屋漬）・小西瓜
II -3-C(a)	西店魚市	内町		魚市・西の店・中の店
II -3-C(a)	駿河屋店	内町		駿河町・駿河屋・本字禮頭
II -3-C(a)	新大工町 土井呉服店	新町	鈴丸川（和歌川）	土井呉服店（直川屋）・雑賀橋・新大工町・水野丹波守上屋敷・伊達家屋敷
II -3-C(a)	紋羽織屋	新町		雑賀屋・御髪・月代・新通一丁目
II -3-C(a)	田中蜜柑市の図	新町		蜜柑市・蜜柑籠・田中町
II -3-C(e)	堂形の図	吹上	松原	堂形射場・和歌道・久野丹波守上屋敷
II -3-C(e)	学習館全景	湊	紀伊水道・紀ノ川・和泉山脈・内川（市堀川）・柳樹	学習館・伝法橋・築地・御船蔵・伝法御殿
II -3-C(e)	医学館	湊		医学館
II -3-D	寄合橋	内町・湊	内川（市堀川）・松	四丁目・寄合橋・京橋・中橋・伝法橋・藩校・町屋・鷲森・火の見櫓・木戸・納屋河岸
II -3-E	岡口御門辺の図	和歌山城・岡・広瀬	三年坂・天妃山・紀伊水道	城郭・岡口御門・広瀬御門・東堀・南堀・東外堀・武家（加納・佐野・岡野・戸田）屋敷・百間長屋・御作事所・番所・土塁
II -3-E	大手御門辺の図	和歌山城		城郭・大手御門・一の橋・東堀・北堀・重臣（三浦・渡辺）屋敷・待合所（腰掛）・大手道
II -3-E	吹上御門辺の図	和歌山城		城郭・吹上御門・吹上大御門・西外堀・西の丸橋・武家（天方）屋敷・御蔵
II -3-E	追廻し口辺往來の図	和歌山城		追廻御門・高石垣・待合所（腰掛）
II -3-E	高石垣の略図	和歌山城・広瀬	三年坂・龍門山	城郭・高石垣・東堀・南堀・東外堀・土塁・広瀬御門
II -3-E	鶴の溪 檜椿の図	和歌山城	鶴の溪・山吹溪・檜椿	南外堀（新堀川）・袖摺松
II -4	堀留眺望・袖摺松	吹上		南外堀（新堀川）・袖摺松
II -4	岡口御門の鯉を見る図	和歌山城		城郭・広瀬御門・東堀・東外堀・鯉
II -4	京橋御門の外 納屋河岸あたりの図	内町・和歌山	内川（市堀川）	京橋・中橋・蔵屋敷・火の見櫓・土塁・納屋河岸・米市・番所・木戸・川舟
II -4	昌平河岸夜店の図 其一	湊		昌平河岸・湊橋・湊橋御門・西外堀（西の丸川）・土塁・夜店・相撲の触れ太鼓・屋形船
II -4	昌平河岸夜店の図 其二	湊	内川（市堀川）	昌平河岸・西外堀・寄合橋・夜店・屋形船
III -1	四方の嵐松	岡	四方の嵐松	鷹匠
III -1	根上り松	関戸村高松	鶴の松・亀の松	和歌道
III -1	時鳥松	新町	時鳥松・和歌川	石屋
III -2	蛭子神社祭日 牛の舌餅を投げる図	湊		水門吹上神社・祭礼
III -2	除夜 日宮元へ 裸祭の図	広瀬・新町	和歌川	大晦日裸祭・大橋・高札・番所・広瀬河岸

4. 『紀伊国名所図会』を読む

『名所図会』に収められている城下町の風景を読み解くにあっては、彩色して観察することを基本的な作業として行った。同書の絵図は木版刷りで、非常に詳細に画いているが彩色されていないため、識別しにくいところがあり、彩色することによって判別しやすくなる。具体例として、2つの絵図を実際に読んでみたい。



図4 『名所図会』京橋御門の外



図5 『名所図会』寄合橋

「京橋御門の外 納屋河岸あたりの図」（図4、後編、1851年）は、和歌山城の正面入口、京橋御門付近の賑わいを画いている。御門の両側には高さ約7m・幅約33mの土塁があった。外堀の内川は幅が約36mと今よりも広く、たくさんの船が行き交う交通の大動脈であった。北岸の納屋河岸には米などが荷揚げされ、土蔵造りの建物が整然と建ち並んでいるのがわかる。しかし、「寄合橋」（図5、第1編、1811年）では、蔵は屋敷地の中央付近に画かれるのみで納屋河岸の表の町並みは普通の町屋になっている。また、図4では京橋と寄合橋の橋詰に火の見櫓が黒板張りとなっているが、図5ではその内部構造が見える状態で画

かれていることがわかる。

江戸時代の約300年間は景観の変化が比較的少ない時期と考えられてきたが、この2枚の絵図をみると、和歌山城下町では江戸時代後期の約40年間に町並みが大きく変化していることに気づく。和歌山は、この間に文政13年（1830）の大火を経験しており、内町の多くが延焼した記録が残っている³⁾。これを契機に内町の多くが防火建築、土蔵造りに建て直されたか、江戸時代後期の目覚しい経済的発展によって町並みを変貌したことが考えられる。

5. おわりに

最後に、本稿の分析をとおして、『名所図会』に城下町和歌山のなかで何が名所としてとりあげられているのか、真景図と思われる城下町をえがいた61枚を分類した（表2）。第1編と後編では、その傾向が大きく異なり、第1編では寺院と神社が36枚中25枚と圧倒的に多く、後編では25枚中14枚が城郭・藩施設・堀等を主に画いている。当初、お城を画くことは、許可されていなかったためか、第1編には城郭がまったく画かれていない。しかし、藩命を受けて刊行された後編には城郭が7件と多くの絵図が掲載されていることから、その間に『名所図会』の性格が大きく変わったことがわかる。

安政絵図と『名所図会』をあわせて読むことによって、立体的に近世の城下町の景観がとらえられる。また、郷土学習・現地学習として歴史・地理の教育に役立てるとともに、観光やまちづくりに活用することができると考えている。

表2 『紀伊名所図会』に画かれた風景

	図 像	第1編 (1811)	後編(1851)	合 計
I 地 形	海・湊	2	1	3
	道路(街道)	0	2	2
II 人工物	神社	4	1	5
	神社・寺院	8	0	8
	寺院	13	0	13
	町屋	4	5	9
	役所	0	3	3
	橋梁	1	0	1
	城郭(扇之芝を含む)	0	7	7
	池・堀・井溝	1	4	5
III 植 生 その他	樹木(松)	3	0	3
	祭	0	2	2
合計		36	25	61

1) 額田雅裕・芝田浩子『城下町の風景－カラーでよむ『紀伊国名所図会』－』、ニュース和歌山、2009。復刻本としては、高市志友・加納諸平『紀伊名所図会』、歴史図書社、1970。などが出版されている。
 2) 葛川絵図研究会「絵図研究の視点と方法」、『絵図のコスモロジー』上巻、地人書房、1988、9～109頁。
 3) 三尾功『近世都市和歌山の研究』、思文閣出版、1994、241頁。

紀州藩主屋敷の景観

—— 二の丸大奥の発掘調査成果から ——

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 北野 隆亮

はじめに

史跡和歌山城の発掘調査は1981年に行われた一の橋大手門再建工事に伴う調査を手始めに、現在では35年目・37次調査にまで至っており、多くの考古学的な知見が得られ、これまで和歌山城の石垣の修復や御橋廊下などをはじめとする復元整備に役立っている。今回は、二の丸西部（大奥）において、平成20年度から継続的に行っている発掘調査（第31～37次）の主要な遺構を報告し、紀州藩主屋敷の景観の一端を明らかにしたい。



二の丸西部（大奥）調査位置図

調査の成果

発掘調査を実施した和歌山城二の丸西部は、建物配置などを描いた江戸時代後期の絵図「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」が残されており、その絵図をもとに、描かれた施設の遺構を推定しながら調査を進めている。第31次から第37次調査の7次の発掘調査で検出した主要な遺構を、江戸時代後期について、①建物に関する施設、②上下水、③庭園、江戸時代初頭の④浅野期石垣、の4項目に整理し、説明を行う。

【①建物に関する施設】

礎石建物 建物に関わる礎石や根石を検出した位置は「御小座敷」（第31次1区）、「御座之間・御対面所御上段・同御下段」（第33次）、「御書斎・御休息・御清之間」（第34次）がある。

階段台石 廊下から庭に降りる階段の台石は「御休息」北側（第34次）と「御対面所御下段」の南側（第36次）がある。「御休息」北側（第34次）は裏庭に降りるためのもので、礎石・階段台石・踏石がセットとなる。



礎石建物（第33次調査）



礎石・階段台石・踏石（第34次調査）

土塀 大奥の居住域と外周の通路部を隔てるもので、居住域の北側を区画する土塀の基礎石組を第31次1区・第32次1区・第34次・第35次調査に渡って検出した。石組石材は幅12～30cm、長さ50～155cmの大きさの砂岩割石を南北面に用いて組み合わせており、側面と天端面をノミで削り平坦面に加工している。石組は天端標高7.90m、幅82cmの規模を測るもので、砂岩石材は北面側2段、南面側1段を積んでいる。



土塀基礎石組（第34次調査）

防火水槽 防火水槽とみられる遺構は、漆喰貯水槽（第31次1区、第32次1区）と埋甕（第35次）がある。漆喰貯水槽は、漆喰を円形の桶状にした水溜で、第32次1区のもの直径1.50m、深さ65cm以上の規模を測る。埋甕は第35次調査で2基検出した。埋甕1は居住域内で検出した。直径1.3mの掘方内に常滑焼大甕を埋め込んだもので、大甕の直径は1.0m、検出面からの深さ約60cmを測る。口縁部を漆喰で包み込み、あたかも地上に露出した部分は円形の桶状に見える。埋甕2は外周通路部で検出した。直径65cmの掘方内に常滑焼の甕を埋め込んだもので、口径62cm、胴部径57cm、深さ57cmの規模を測る。これらの防火水槽とみられる遺構は大奥絵図に描かれていないものである。



漆喰貯水槽（第32次調査1区）

穴蔵 石組の地下室で、幅1.8m、長さ4.6m以上、深さ2.3mを測る規模の大きなもので、床面に緑色片岩の板石を敷き詰め、側壁は砂岩の切石を用いて構築している（第37次）。穴蔵の用途は地下式の倉庫で、常時金銀を納めたり、火災などの非常時に家財を一時的に避難させたりと、その用途は様々であったとされる。



穴蔵（第37次調査3区）

地鎮・鎮壇土坑 土坑は直径約60cm、深さ約25cmの規模を測り、瓦片を詰めて半分の深さまで埋めた後、直径35cmの未使用の堺焼播鉢を伏せた状態で埋納したもので、大奥御座之間の床下にあたる場所で検出したことや、その特殊な埋納状況から江戸時代後期の建替時の地鎮・鎮壇の遺構と判断した。埋土から、鉄製小皿1点、



地鎮・鎮壇土坑（第33次調査）

ガラス製小玉5点・板状1点・棒状1点・薄膜状細片120点以上などが出土した。この事例は、紀州徳川家の地鎮・鎮壇儀式の実態を知る上で貴重な資料といえる。

【②上下水】

井戸 上水に用いられた井戸として、石組のもの（第37次）と瓦積のもの（第32次2区・第36次）を検出している。石組井戸は内径90cm、深さ7.0mを測るもので、内部は江戸時代の旧状を良好に保っており、現在においても水が湧きだしていた。井戸の地表面は、砂岩の石材を板状に加工して並べ、一辺2.6mの正方形の範囲を石貼りとしたもので、石貼りの一部には漆喰を用いた補修痕跡がみられた。瓦積井戸は、厚さ2cmの瓦製井戸枠を数枚立て並べて円形に積み重ねたもので、復元直径約1.2mを測る。

石組溝・土管溝・石組溜枡・石組集水枡 大奥居住域の排水は、石組と土管による溝によって石組溜枡を経て石組集水枡に集水され、櫓台石垣の地下を貫通する石製樋を通して堀に排水する仕組みである。石組溝は第31次1区・第32次1区・第35次調査に一連のものを検出した他、第32次2区・第34次と第35次調査で一連の暗渠となる石組溝・石組溜枡を確認した。第31次1区から第32次1区までの石組溝は絵図に描かれているもので、幅90cm、石組天端からの深さは大奥側が約70cm、外周通路側は約85cmを測る。底面に結晶片岩の長方形板石を敷き詰め、側面は砂岩割石を3段積み上げるものである。なお、大奥居住域側から土堀の地下を暗渠でくぐり石組溝に排水した排水口が3ヵ所みられる。第32次2区・第34次で検出した一連の石組溝・石組溜枡は暗渠となったもので、大奥絵図には描かれていない。土管の連結による溝は第31次1区・第32次2区・第33次調査・第35次調査において検出した。石組集水枡は第31次1区で検出した。大奥外周通路部の北西隅に設けられており、東と南側の石組溝からの排水を集水するものである。平面形は方形で、



石組井戸（第37次調査2区）



石組溝（第31次調査1区）



石組溝・石組溜枡（第34次調査）



石組集水枡（第31次調査1区）

南北 1.4m、東西 1.2m、深さ約 2.0m の規模を測る。集水枡の底面は結晶片岩の板石を敷き詰め、側面下部は砂岩切石の石組としているが、側面上部は結晶片岩の割石を積んでいる。西面の底部付近に砂岩製の樋門を造り付ける。樋は加工石材を上下に組み合わせたものである。なお、集水枡の石組上面西側 1/3 は結晶片岩の板石で蓋をしていた。蓋石は東西幅 0.9m、南北長 1.95 m、厚さ 10cm の規模を測る巨大な石材が用いられていた。

【③庭園】

石組池 石組池は第 36 次調査で確認したもので、中庭の中央部に位置する。東西 16.6 m、南北 7.2 m の規模を測る。平面形は幅 2.0 ~ 2.5 m の溝が「S」字を描くように造られており、いわゆる心字池（「心」の草書体に似せて造られた池）とみられる。池岸は、景石（庭石）とみられる球形や海蝕を受けた不整形な自然石を組み合わせ、一部には直径 5cm 程度の玉石を密に貼り付けた玉石貼護岸もみられる。石組の主体は砂岩の自然石を用いており、緑色片岩や花崗斑岩などが一部にみられる。池の深さは、浮石などの状況から 20cm 程度の浅い水深であったと考えられる。また、橋台石として、北岸に砂岩の切石 1 点、南岸に砂岩の割石 1 点が石組みに組み込まれている。この調査で大奥中庭は、絵図に描かれているとおりの心字池を中心とした池泉回遊式庭園であることを確認した。



石組池（第 36 次調査）

漆喰池 第 32 次 2 区南半部で検出した平面形が瓢箪形の人工池であり、大奥絵図の坪庭部分に描かれている。南北 5.30 m、東西 3.56 m の平面規模を測る漆喰を厚く塗り固めたもので、底面が北側に向かい低く作られており、南端部で深さ約 20cm、北端部は 38cm を測る。漆喰塗りの壁面には土管を接続して導排水施設としている。北西隅の壁面下部には口径 36cm 以上、高さ 54cm 以上の大谷焼甕を漆喰に埋め込んでおり、口縁部を斜めに壁面から開口する。この埋甕は類例から「観賞魚（金魚などの小魚）の寝床」とみられる。池の周囲には漆喰で側壁上面に固定した石材（景石）がみられる。また、橋台石を東西対応する位置で各 1 基検出した。橋台石は花崗斑岩の自然石である。



漆喰池（第 32 次調査 2 区）

景石・飛石・玉石敷 景石は第 34 次と第 35 次で検出した。庭の各所に数個単位で組み合わせられて配置されていることを大奥絵図から読み取れるが、原位置を保っている例は稀である。飛石は第 32 次 1 区と第 36 次で検出した。庭園内部の通路導線に配置された状況を大奥絵図か

ら読み取れるが、景石同様に原位置を保っている例は稀少である。玉石敷は第34次・第36次・第37次2区で検出した。玉石敷とは、直径1～3cmの玉石を厚さ5～10cmに敷き詰めたもので、第34次では「御清之間」の東側と「御休息」の北側の一部、第36次では石組池の北側、第37次2区は石組井戸の周囲で検出した。これらの玉石敷は、大奥絵図に描かれた、灰色で着色された範囲とほぼ一致している。

水琴窟 すいきんくつ 水琴窟は第34次・第36次・第37次3区で検出した。水琴窟とは、庭に作られる手水鉢を中心とする^{つくばい}蹲踞の排水施設としての構造物である。実用の排水施設として始まったが、陶器内部に落ちる水滴の反響音を鑑賞する施設に発展したことから「水琴窟」と呼ばれる。第34次で検出した水琴窟は、高さ約30cmの常滑焼甕を逆位に埋め込み、甕の底部中央に直径2.0cmの孔を開け、その上に復元直径75cmの皿状に漆喰で水門を設けたものである。水門は37.0cmの範囲が残存している。絵図にみえる「御書斎」北西角の縁側に接した位置にあたる。構造からみて、排水機能に加えて鑑賞する機能を兼ね備えた施設といえる。第36次では、江戸時代中期の水琴窟を2基検出した。調査区南東隅で確認した水琴窟は、堺焼播鉢を逆位置に埋め込み、播鉢の底部中央を穿孔している。西側の水琴窟は肥前系陶器の鉢を逆位置に埋め込み、鉢の底部中央に直径10cmの円形の穴を穿孔して設置されていた。これらの水琴窟は、江戸時代後期の整地によって、上部の水門と呼ばれる漆喰の集水施設を壊され埋没していたものである。2例とも構造上、反響音が出ないものと考えられ、鑑賞施設に発達する前段階の、少量の水を処理する機能を持った排水施設と考えられる。第37次3区で1基検出した。直径約50cmの穴に堺焼播鉢を逆の位置に埋設したもので、上部が欠失している。水琴窟は手水鉢の手前に作られることから、大奥絵図にみえる「御数寄屋」前の垣根で囲まれた「茶庭」内部に手水鉢が描かれており、これとセットとなる施設であると考えられる。



水琴窟 (第34次調査)

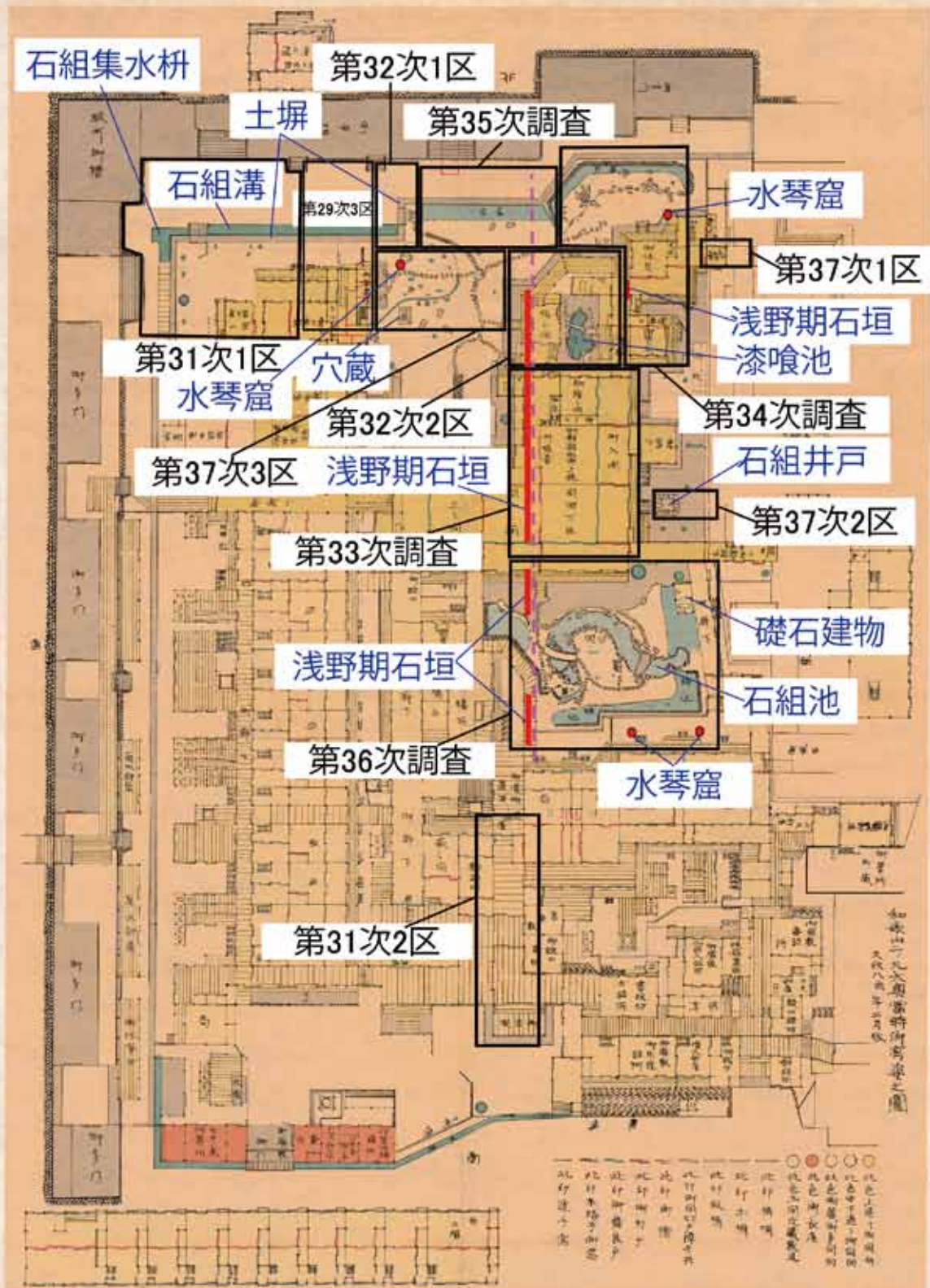
【④浅野期石垣】

二の丸を西側に拡張するため、江戸時代初期に西堀を堀幅約20mまで埋め立てるが、埋め立て前の西堀に面した二の丸西面石垣（浅野期の石垣）を第32次2区・第33次・第35次・第36次にわたって延長61m分を確認した。また、この石垣の東側（郭側）で、対になる石垣面を第34次において検出したことから、江戸時代初頭の二の丸は、櫓台石垣で囲まれていたことが明らかとなった。



浅野期石垣 (第32次調査2区)

和歌山二ノ丸大奥當時御有姿之圖
 改月二年酉八政文



史跡和歌山城 二之丸大奥の調査位置 (第31-37次調査)
 (「和歌山二ノ丸大奥當時御有姿之図」に加筆して作成)

紀州藩主屋敷の景観

—文献にみる二之丸大奥の穴蔵について—

和歌山市立博物館 高橋 克伸

1. 問題の所在

史跡和歌山城第37次発掘調査で、和歌山城二之丸大奥跡から穴蔵遺構が検出された（「同現地説明会資料」）。本論は、江戸時代後期の絵図で確認される大奥穴蔵について文献史料からアプローチを試みる。穴蔵については、今回の遺構を含め、江戸藩邸（上屋敷）で石積みの遺構が、また城下町の「鷺ノ森遺跡第3次発掘調査」で側壁が板材の遺構が検出されている。さらに、江戸藩邸（中屋敷）の藩邸図にも穴蔵が描かれている。ところで、穴蔵の研究は古泉弘著『江戸の穴』（1990、柏書房）で発掘成果や文献などにもとづき詳述されている。しかし、多くの遺構は上屋（覆屋）が破壊された状態で検出され、その構造が判明しない。本稿では、和歌山城二之丸大奥の穴蔵に関する文献史料を紹介し、大奥穴蔵の上屋について報告する。

2. 文献にみる二之丸大奥の穴蔵について

一般的に穴蔵の用途は地下式倉庫で、火災時の収納庫などの保管施設として用いられた。しかし、上屋の構造が一部の事例を除いて、どのようなものであったか判明しない。本稿で紹介する「大普請方御役所様 御二之丸御穴蔵御書付」（写真：以下、「御書付」と略す）は、和歌山城二之丸の大奥内にあった穴蔵上屋の工事見積の史料である。そこには、部材の名称・寸法や費用、設置方法などが記され、そこから上屋の構造が読み取れる。

【翻刻】

大普請方御役所様 御二之丸御穴蔵御書付 三月 頭料喜右衛門
覚

御二之丸大奥御穴蔵 一 御桁石長壺丈巾壺尺角 式本 同長壺丈巾尺二寸厚サ尺 壺本 同長壺丈巾尺角 壺本 〆四本 此才四拾三才 一 御板石長壺丈式尺三枚継 詰巾七尺五寸厚サ四寸 同長八尺詰巾巾四尺五寸厚サ四寸 此才五拾才〇四歩 〆九拾三才四歩 三三□（けヵ） 代銀三百八匁式分二リ 持届ケ賃七拾五匁 一 御細工居立賃 代銀百三拾五匁 〆五百拾八匁二分式リ

御上之間御茶所御穴蔵 一 御桁石長壺丈巾壺尺角 式本 同長壺丈巾尺二寸厚サ尺 壺本 同長壺丈巾尺角 壺本 〆四本 此才四拾五才式歩 一 御板石長壺丈式尺三枚継 詰巾八尺五寸厚サ四寸 同長四尺詰巾九尺厚サ同断 此才五十五才式歩 〆百才四歩 三三□（けヵ） 代銀三百三拾壺匁三分二厘 持届ケ賃 八拾式匁 御細工賃居立賃共 代銀百七拾五匁 〆五百八拾八匁三分二厘

二口合 壺貫百六匁五分四厘

右之通り惣御新石ニ而中切御場所へ持届ケ居立可仕候 寅三月 頭料喜右衛門 大御普請方御役所様

概要は、頭料（棟梁）喜右衛門が藩の大普請方へ提出した二之丸穴蔵についての工事見積の「覚」である。内容は、「御二之丸大奥御穴蔵」と「御上之間御茶所御穴蔵」（以下、「大

奥穴蔵」、「茶所穴蔵」と略す)の2か所について、それぞれの桁石と板石の寸法、本数、体積、板石の設置方法、また材料費や運搬費、工賃、総工費が記されている。さらに、新石を使い現場で設置するとある。年代は不詳であるが、奥付に「寅三月」とある。以下、表にした。

【御二之丸大奥御穴蔵】

	長	幅	厚	本数	合計	体積	合計	代銀
桁石・A	10尺	1尺	1尺	2	} 4本	} 43才	} 93.4才	
桁石・B	10尺	1.2尺	1尺	1				
桁石・C	11尺	1尺	1尺	1				
板石・D	12尺	7.5尺	0.4尺	3枚継		} 50.4才		
板石・E	8尺	4.5尺	0.4尺					
材料代								308.22 匁
持届け賃								75.00 匁
細工居立賃								135.00 匁
総代金								518.22 匁

【御上之間御茶所御穴蔵】

	長	幅	厚	本数	合計	体積	合計	代銀
桁石・F	11尺	1尺	1尺	2	} 4本	} 45.2才	} 100.4才	
桁石・G	11尺	1.2尺	1尺	1				
桁石・H	10尺	1尺	1尺	1				
板石・I	12尺	8.5尺	0.4尺	3枚継		} 55.2才		
板石・J	4尺	9尺	0.4尺					
材料代								331.32 匁
持届け賃								82.00 匁
細工居立賃								175.00 匁
総代金								588.32 匁
2口(大奥穴蔵、御茶所穴蔵) 総代銀								1,106.54 匁

表から以下のようなことがわかる。まず「大奥穴蔵」と「茶所穴蔵」には、桁石や板石という部材を使っていた。このことは、石材の上屋があったことがわかる。各上屋は桁石4本と板石4枚で構成され、板石については「三枚継」や「詰巾」など、工法とも考えられる文言がある。2か所の穴蔵の桁石を大きさで分類するとA・H組が3本とB、G組が各1本、C・F組が3本の4グループに分けられる。ただ桁石B、Gの幅が1.2尺と他の桁石より幅が広い。また、厚さは桁石が1尺、板石が0.4尺で統一されている。そして、現場へ運び込み加工・設置し総代銀が1,106.54匁である。新石材切り出しにあたって比較的、規格統一された部材加工を行っており、2か所の穴蔵は、ほぼ同じ構造であった可能性を示唆している。

つぎに、2か所の穴蔵について絵図と対比したい。ひとつは、「和歌山御城内御総絵図」(以下「総絵図」と略す。作成推定時期：寛政9年・1797～同11年・99、あるいは18世紀末・19世紀初頭頃)で、他は「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」(以下「大奥有姿之図」と略す。

款記：文政8年2月改・1825)である。「総絵図」の二之丸には穴蔵が3か所描かれ、うち中奥には切妻屋根の上屋を思わせる穴蔵が1か所、描かれている(ただし廃棄されたか、訂正されたかは不明な同表現の穴蔵が付近にもう一つ描かれているが数に含まない)。そして、大奥には「御数寄屋」付近(今回の検出遺構)と「局」棟東側中庭の2か所が描かれている。3か所すべてに「穴蔵」と名称が付されている。「御書付」のタイトルが「御二之丸御穴蔵」とし、本文では「大奥穴蔵」、「茶所穴蔵」としているのは、あきらかに中奥と大奥の穴蔵を区別してと考える。また、「大奥有姿之図」では4か所描かれ、「総絵図」の大奥2か所に加えて、「茶所」部屋付近と「御広敷御門」付近に描かれる。このように両絵図には穴蔵が描かれ、両絵図とも「御数寄屋」付近の穴蔵が検出遺構で、「御数寄屋」付近や「茶所」部屋にみるように茶道具など重要物品を扱う施設付近に設置されていることがわかる。ちなみに絵図上で、「御数寄屋」付近の穴蔵の平面規模は、「総絵図」(基準格子あり)では、約1.5間×1間、「大奥有姿之図」が、建物の柱間からみて約1間×0.5間余と規模に差がある。検出遺構は、長さが4.6m以上、幅は1.8mで、規模的には「総絵図」が検出遺構に近い。しかし、絵図上の表現の問題、あるいは穴蔵上屋の表現の違いなど検討の余地はあるが、検出遺構が絵図で確認され、これ以外にも存在したことがわかる。

そこで、「御書付」にある2か所の穴蔵と絵図とを対比したい。「御書付」には、「大奥穴蔵」と「茶所穴蔵」の2か所の工事が記されている。このうち「茶所穴蔵」は、絵図で確認できる「茶所」部屋(「総絵図」や「大奥有姿之図」にある)の前にある中庭に「茶所穴蔵」(「総絵図」には表現なし)のことである。そして、「御書付」により桁石と板石で架構された上屋があった。「大奥有姿之図」の表現をみると規模は約1間×0.5間余である。あきらかに「御書付」の規模よりは小さい。仮に絵図での表現が出入口を表現していると考え、「茶所」部屋前の中庭を含め、または付近の施設の下に穴蔵があったことになる。このような構造を表現しているのが、同絵図の「御広敷御門」付近にある穴蔵である。穴蔵上屋に建物の柱が据えられる構造で描かれている。一方、「大奥穴蔵」については、今回検出された穴蔵か、「局」棟東側中庭の穴蔵かは分からないが、どちらかが桁石と板石で架構された上屋をもっていたことはあきらかである。以上のように、絵図と「御書付」を検討することにより、石製の上屋をもつ穴蔵であったことが確認される。

そこで、もう少し問題をすすめてみたい。今回の検出遺構が「大奥穴蔵」にあたと仮定した場合、検出遺構は長さ4.6m以上、幅1.8m、深さ2.3mである。長さについては、調査途中であるので「以上」という計測表現になっているが、幅は内法1.8mである。「大奥穴蔵」の桁石と板石をどのように架構するかは問題であるが、今、岡山城本丸中の段にある穴蔵を参考としたい。この穴蔵上部には、南北に渡された2本の延石と南東に短い1本の延石が架けられ、もともと北西にもう1本存在した公算が強いと報告されている。ここでいう延石とは「桁石」のことで、4本の桁石が架構されていたことになる。そこで「大奥穴蔵」の部材をみると4本の桁石が使われている。このことから、岡山城と同様であった可能性がある。つぎに、板石であるが、この点については、桁石のうえに据えられていたと考えられる。板石D・Eがどのように配列されていたかは、さらなる推測になるが、「三枚継」や「巾詰」から板石D・Eが連続し機密性を高めた屋根(陸屋根)として設置されたと考える。これらを組み合わせると長さ20尺(6.06m)、幅7.5尺(2.2725m、四捨五入し2.3mとする)となる。今、

検出遺構の幅が内法 1.8m であり、板石は幅 2.3m である。この数字を二等分すると、90cm と 115cm で差は 25cm である。じつはこの差が、板石が側壁の天端石に架かる幅と考えられる。ただし、出入口は石以外の、例えば木製の出入口であったと仮定した場合である。なぜなら、桁石 B・G の幅が 1.2 尺と他の桁石より 0.2 尺（約 6cm）広い。これは、出入口を受けるための縁幅であったと考えるが、このことも含め今後の発掘調査成果を待ちたい。

ところで、「御書付」の作成時期について検討してみたい。上述のとおり奥付は、年不詳の「寅三月」で、頭料（棟梁）喜右衛門が紀州藩の大普請方へ提出している。大普請方とは、藩施設の土木を職掌する。穴蔵の工事は石垣などと同様に土木工事として行われていることがわかる。また、頭料喜右衛門はどのような人物であるかは不詳であるが、町方の石工であると考える。和歌浦の不老橋の修理文書に「頭料 喜右衛門」として同人物が登場する。この史料も作成時期は年不詳で「六月」のみが記されているが、内容から嘉永 7 年（1854）6 月の伊賀上野地震の影響で不老橋の修理を余儀なくされたと推察し、嘉永 7 年と考えた。ちなみに嘉永 7 年（= 安政元年）は「寅」年にあたる。そこで、「御書付」の時期を推察してみたい。まず「茶所穴蔵」についてみると、「総絵図」には描かれず、「大奥有姿之図」には描かれる。つまり、「茶所穴蔵」は、「総絵図」作成以降から文政 8 年までに造られたかもしれない。そうすると、石製の上屋設置工事を必要とする要因は、用途上を考え火災などによると考える。この間、文化 10 年（1813）11 月には大奥が焼失する。この火災は、広敷内から出火し切手御門、続御多門、駿河櫓近くまでで、大奥全体を焼失するものでなかったが、もしこれが要因とすると、5 年後の文政元年（1818）が寅年にあたるため、文政元年 3 月に藩に提出されたことになるが、絵図を含めまだまだ検討が必要であろう。

3. 今後の課題

以上、和歌山城二之丸大奥の穴蔵には、桁石、板石を使用した上屋があったことをあきらかにした。また、検出遺構から「大奥穴蔵」の上屋を想定し、文献史料から作成時期を検討してみた。本論は推定の域を脱しないが、今後、発掘成果を前提に文献史料を調査し発掘成果との接点を見出して行きたい。

※末筆ながら北野隆亮氏、山下奈津子氏にはご助言いただきました。御礼申し上げます。



遺跡にみる三の丸武家屋敷の風景

公益財団法人 和歌山県文化財センター 丹野 拓

要旨

和歌山城三の丸には家臣の屋敷が建ち並び、格式の高い屋敷では家紋入りの瓦を葺くことが知られている。当センターでは三の丸の東部を発掘し、砂地を地盤改良して造成された7区画の家臣の屋敷地を確認した。建物跡は残されていないが、池・井戸・暗渠といった水回りの施設やゴミ捨て穴などが残されている。そこで出土する遺物からは、当時の武家屋敷の日常風景が生き生きと浮かび上がってくる。

1. 市街地の下に眠る「三の丸」の武家屋敷群

和歌山城は石垣の美しい城で、北と東には水をたたえた堀が巡っている。

この堀は江戸時代の和歌山城の内堀で、堀の北から東にかけて立ち並ぶ和歌山市役所やホテル・郵便局・裁判所・検察庁周辺が三の丸の武家屋敷跡にあたる。昔の外堀は既に埋め立てられており、内堀と外堀に囲まれた昔の面影は失われている。

三の丸の武家屋敷地は政務の場である二の丸御殿に至近の地であり、次の家老屋敷が建てられていた。

安藤家（付家老・田辺藩主）約 38,000 石

水野家（付家老・新宮藩主）約 35,000 石

三浦家（家老・貴志川）約 15,000 石

また、家老以下 50～60 家の家臣の屋敷地が建てられており、300～500 石取りの家臣の屋敷地が多い。

和歌山県文化財センターでは平成 18 年度以降、裁判所や検察庁の建て替え工事に伴い三の丸東部の武家屋敷地跡の調査を続けてきた。

今回はこれらの調査により見つかった遺構や出土遺物を紹介しながら、紀州藩士の生活の様子をみていくことにしたい。

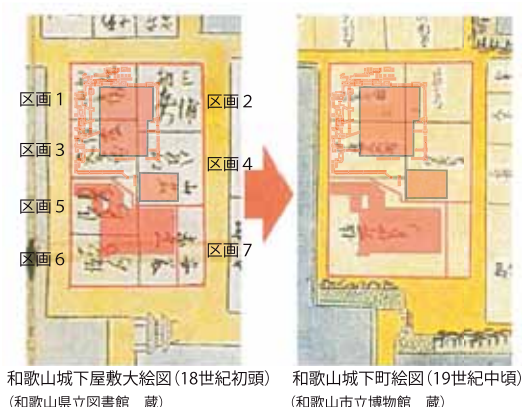


図1 三の丸東部屋敷地の発掘調査区

<三の丸東部武家屋敷地の当主の変遷状況> (図1)

- | | | | | | | | |
|-----|--------|---|---------|---|---------|---|----------------|
| 区画1 | 加納十兵衛 | → | 水野次郎右衛門 | → | 向笠伴右衛門 | → | 向笠三之助 (不明) |
| 区画2 | 三浦助左衛門 | → | 加納兵左衛門 | → | 岡部小左衛門 | → | 岡部小左衛門 (500石) |
| 区画3 | 伊藤久兵衛 | → | 伊藤楠之丞 | → | 伊藤又兵衛 | → | 伊藤又兵衛 (300石) |
| 区画4 | 山名八左衛門 | → | 山名八左衛門 | → | 豊嶋五郎左衛門 | → | 豊嶋半之丞 (500石) |
| 区画5 | □□□左衛門 | → | 佐野弁左衛門 | → | 佐野伊左衛門 | → | 佐野出羽守 (3,000石) |
| 区画6 | 大高源□□門 | → | 大高源右衛門 | → | 〃 (佐野) | → | 〃 |
| 区画7 | 安藤喜□ | → | 安藤忠兵衛 | → | 〃 (佐野) | → | 〃 |

* (17世紀中頃) → (18世紀初頭頃) → (18世紀末～19世紀初頭頃) → (19世紀中頃)

2. 景観一変、三の丸東部の屋敷地造成

和歌山城三の丸の南には石切り場として知られる小さな岡があり、片岡町という地名と式内社の刺田比古神社が残されている。付近には岡の里古墳が築かれているほか、三の丸東部武家屋敷地の下層からは須恵器や埴輪の破片が出土することから、この付近は『続日本紀』の神護景雲3（769）年条で陸奥の大伴部の祖先が住んでいたという紀伊国名草郡片岡里の一角にあたり、当時の紀の川に沿って砂地に古墳群が築かれていたものと推測される。

古代から中世になると紀の川主流の流れが変わったことが知られており、旧流路に面した三の丸東部では土師器片混じりの砂が覆いかぶさっている。

遺構はあるが土器はほとんど出土せず、古代～中世のムラからは遠いようである。室町時代になると土壙墓群が築かれている。砂地の標高は2～3mである。

和歌山城付近はいわゆる雑賀衆の勢力圏内であったが、羽柴秀吉に制圧されて城郭が建設される。

1585～1600年 羽柴秀長築城。桑山重晴が城代として入り、後に藩主となる。

1600～1617年 浅野幸長が入城。

1617～1867年 徳川頼宣が入城し、紀州55万5千石の城下町として栄える。

三の丸東部では桑山家の家紋入り軒丸瓦が出土している。桑山期や浅野期に造成が始まり建物が建てられたのであろうが、その頃の陶磁器類の大半は後の屋敷地造成土中に混ざっている。各時期の遺構面から土取り穴とみられる深い穴が掘られており、災害にあう度に地表面の瓦礫と砂と地下の土を混ぜてかさ上げして、造成地を刷新した様子が見える。

3. 屋敷構えと庭の様子

近世の屋敷に葺かれる瓦は、巴紋軒丸瓦と唐草紋軒平瓦、鬼面の鬼瓦というセットが多い。和歌山城の天守や御殿でも基本は同じ傾向で、鬼瓦だけ三つ葉葵紋の鬼瓦を使用している。これに対して、三の丸の安藤家屋敷地からは下がり藤紋、水野家屋敷地からは澤瀉紋おもだかの軒瓦が出土している。紀州藩の家老屋敷では軒丸瓦・滴水瓦・鬼瓦に家紋の入った瓦を葺く傾向があり（奥村薫2014「和歌山城出土の滴水瓦」『紀伊考古学研究』第17号）、大きな屋敷地に家紋入りの瓦葺き建物が威容を誇っていた。三の丸東部では安藤家と三浦家の分家があり、こちらでも家紋入りの軒丸瓦が出土している。外観で安藤家や三浦家一門の屋敷だと分かるようになっていたようである。



写真1 三の丸東部で出土した家紋瓦（左から桑山家・三浦家・安藤家・紀州徳川家）

屋敷の土地境界は土塀の基礎地業跡が残り、外壁も絵図を見る限り土塀が多かったものと考えられる。母屋の跡は残されていないが、多量の瓦が出土しており、礎石建ち建物であったらう。区画1の屋敷地内には柵状の跡があり、屋敷地内はいくつかのスペースに区切られていたことが分かる。屋敷の中央からやや奥にかけて遺構の少ないスペースがあり、この付近に母屋が想定される。母屋に隣接するオモテ寄りの場所に熱を受けた場所があり台所か風呂であろうか。オモテ寄りには井戸や石組柵、暗渠も確認される。屋敷の奥には小さな土坑と巨大土坑があり、裏庭にゴミを埋めていたようである。

南側の屋敷地(区画7)の下層では池が二つ確認された。一つは安藤家の敷地にある南北8.0mの池である。もう一つの池は大きな心字池である。付近では数々の茶道具とともに鳴海織部の向付等といった名品が出土している。織部好みの茶陶は茶人としても有名な桑山重晴か浅野幸長に関係するものであろうか。江戸時代の各屋敷地でも茶道具・煎茶道具が出土している。小さな庭園を前に、文化人としての側面を磨いていたのであろう。

江戸時代には園芸が盛んで、陶磁器の植木鉢のほか、鉢や播鉢の底に穴をあけた転用植木鉢を使う。向笠家(区画1)から伊藤家(区画3)にかけて10点以上が出土している。

伊藤家の屋敷地では、幾筋かの畝と水溜め用とみられる窪みのある家庭菜園のような遺構も見つかっている。この窪みからは染付の鳥形の小さな蓋が出土したほか、周囲の屋敷地でも餌猪口(餌入れ)や餌播鉢が出土している。また、向笠家の屋敷地では藩主に拝領した御庭焼の可能性もある黒釉で内面に金箔を貼った鳥形香炉片がみついている。

このように三の丸の武家屋敷では、瓦葺きの建物の縁側で緑に囲まれた池を眺め、鳥の鳴き声を聞き、お茶をたしなむ武士とその家族の姿が思い浮かぶ。

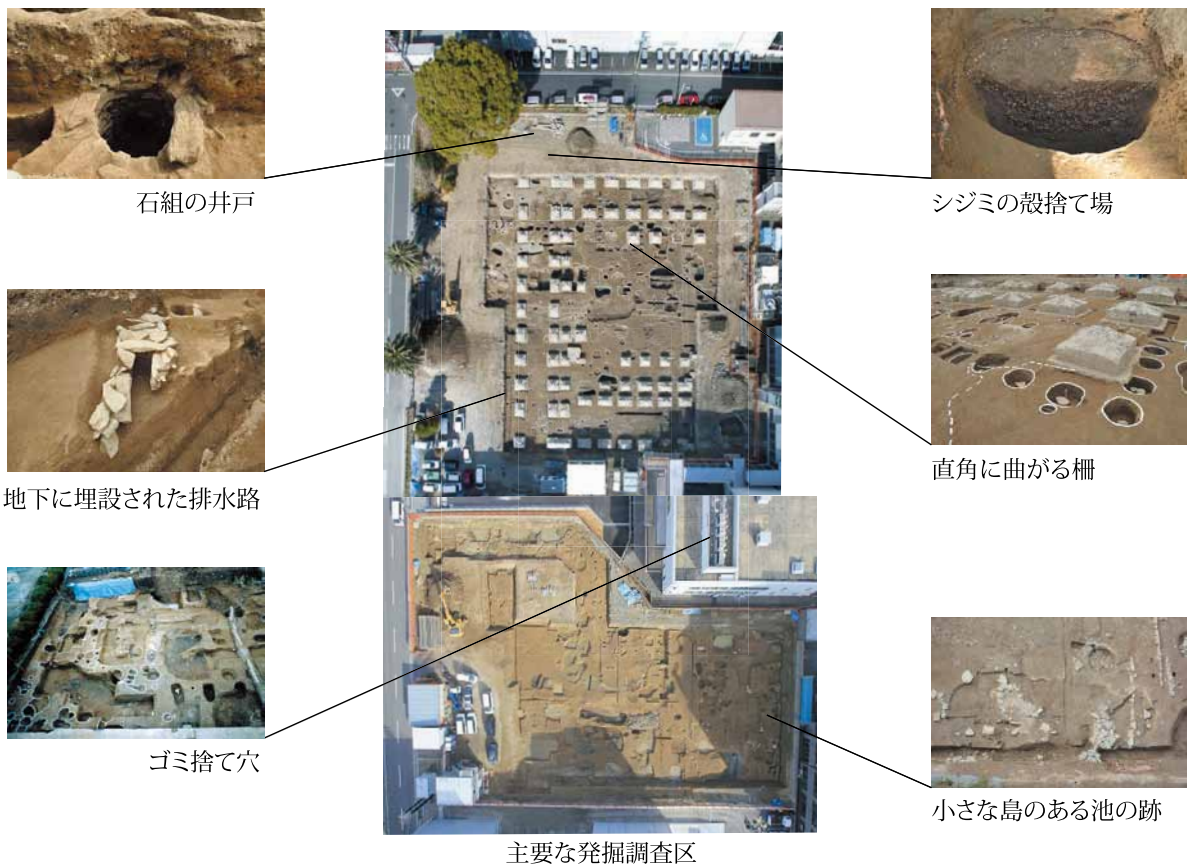


写真2 三の丸東部屋敷地の発掘調査

4. 武家屋敷での暮らし

武家屋敷の中での暮らしは、どのようなものだったのであろうか。

武士らしい道具といえば刀や脇差であるが、調査では鑷(1)・切羽(2)といった刀の部品や小柄(3)・筭(4)といった付属品が破損した状態で見つかっている。硯や水滴も多数見つかることから、文武両道に励んだ近世武士の姿がうかがえる。

身だしなみを整える道具は、整髪料を入れる鬢盥(5)や紅皿(6)、お歯黒壺(7)が多量に出土している。また、香を焚く香炉のなかには、珍しい鳥形香炉(8)も見つかっている。

灯りの道具は素焼きのほかに京信楽系・瀬戸美濃系・備前焼の灯明皿類があり、壁掛け式の灯明具・短檠も確認できる。油の補充には、油壺や油徳利が使われている。

茶道の道具は17世紀初頭の志野茶碗・備前水指・織部向付といった焼き物がみられ、煎茶道の道具は19世紀前半頃の多数の涼炉(9)や染付・朱泥・素焼きの急須(10)、京信楽系・瀬戸・伊予の郡中十錦といった多様な味わいの湯呑(11)が使われている。

喫煙具は、水口キセルを含む多数のキセル(12)や、灰釉・鉄釉・練上手の灰落とし(13)がある。表土からは嗅ぎタバコ用の鼻煙壺(14)も出土しており、文化水準の高さがうかがえる。

様々な暮らしの道具がみつかっているが、圧倒的多数を占めるのは食膳具である。江戸時代前期のものは少なく、後期から幕末にかけて急激に増加するが、江戸時代中期には肥前系磁器が多量に流通し、現代の食卓と同じ「染付の飯碗と漆塗りの汁椀」という組み合わせが成立する。調理具は堺・明石・丹波・備前・信楽の播鉢を使い、瑞芝焼をはじめとする地元の行平鍋や土瓶が多量に出土する。調味料入れは、泉州岸和田の焼塩壺や大谷焼の醤油徳利、地元和歌山の砂糖精製土器(糖漏)がみつかっている。伊万里の徳利や猪口では酒を飲んだり、蕎麦を食べただろう。

19世紀には窯道具(15)とともに産地不明の軟質施釉陶器類や素焼きの土器・ミニチュア土製品、無地の磁器などが多数出土しており、簡易な焼き物作りもできる状況が備わっている。売り物にしては微妙な出来栄えの陶磁器は、この周辺で焼かれたのだろうか。

これらの道具は屋敷地の庭に大きな穴を掘って埋められている。庭にはシジミやカキ・サザエの殻を埋めた穴もあり、食卓に海の幸があふれていた様子がうかがえる。



写真3 武家屋敷の道具(左上から刀装具、化粧具、香炉、左下から煎茶道具、喫煙具、窯道具)

鷺森御坊・寺内の成立と和歌山城下町の形成

— 鷺ノ森遺跡の発掘調査成果から —

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 西村 歩・井馬 好英

はじめに

鷺ノ森遺跡は和歌山市鷺ノ森周辺に所在する弥生時代から江戸時代の複合遺跡である。伏虎中学校区小中一貫校建設計画に伴う校舎建て替え工事に先立ち、平成24年10月から鷺ノ森南ノ丁1、市立城北小学校敷地内において継続的に発掘調査が行われている。すでに第8・11次調査を完了しており、現在第13次調査を実施中である。

既往の調査と今回の調査成果をあわせ、調査地の南端付近をほぼ東西に走る中世末期の堀跡や、近世城下町関連の建物遺構、道路遺構などの存在が明らかとなった。また生活の実態に関連した粘土採掘坑などの遺構、遺物も検出された。

調査地は中世末期に成立した鷺森御坊（雑賀御坊、現在の本願寺鷺森別院）、およびその寺内の南部域であり、近世以降に形成された城下町割との接点にあたる（図1）。近世に製作された城下町絵図類にも、鷺森寺内の特殊な街並みが描かれている。したがって、調査地周辺は和歌山城下町の形成史上、歴史地理的観点からみて重要地点であり、成立期の御坊や城下町の景観に関わる豊富な知見が得られた。



図1 鷺森別院の伽藍と寺内の範囲（江戸時代後期以後）

1. 城下町の景観に関わる調査成果

調査地の現状は小学校校庭で、表土の標高は3.4～3.6 m、第13次調査区の面積は約1200 m²である。近現代の層序は調査地点により大きく異なるが、基本的には下層から明治～昭和前期の盛土整地層、昭和20（1945）年7月の米軍による和歌山大空襲時の焼土層、戦後復興時の整地層、学校建設時の整地層に大別される（図2）。空襲や戦後復興で実施された区画整理により景観は一変したが、調査では地下に埋もれた和歌山城下町割が検出された。

調査では近代以降の層を機械掘削で除去し、近世遺構面以下を調査対象とした。江戸時代の遺構面は後期～末期（第1面：18世紀後半～19世紀）、中期（第2面：18世紀）、初頭～前期（第3-1面：17世紀）の計3面である。また第3面では地点により第3-1面に時間的連続性をもつ戦国時代末期の遺構面（第3-2面：16世紀後半）が存在する。本稿では近世城下町割に関わる第1面、鷲森御坊の成立に関わる第3-2面を取り上げる。

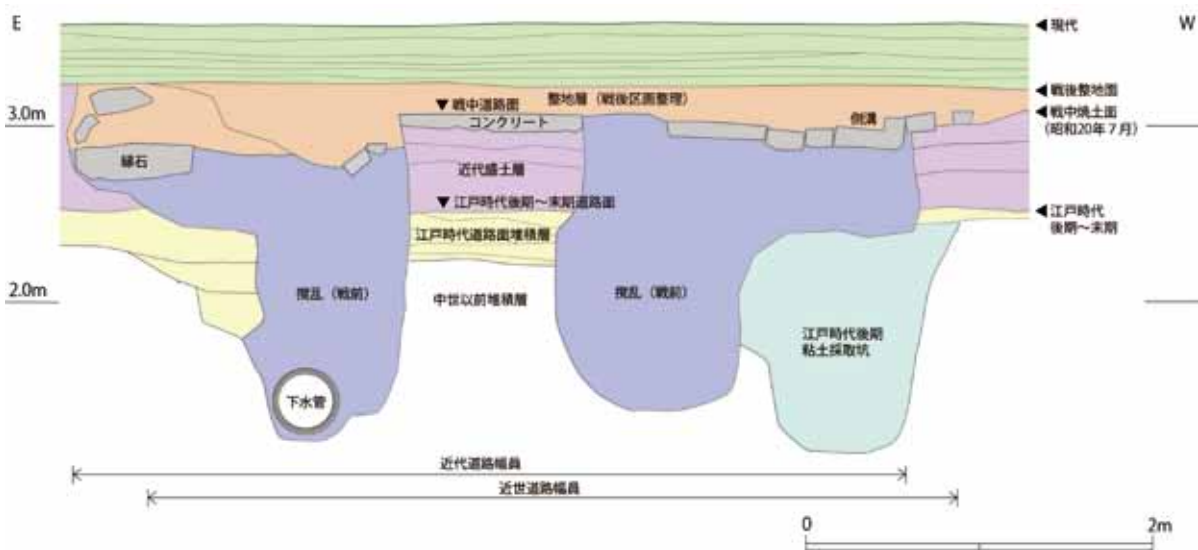


図2 土層堆積状況概念図（調査区南壁・SF-6横断面）

（1）第1面（江戸時代後期～末期）

第1面は標高2.4～2.7 mで、道路遺構とこれに区画された町割遺構（屋敷地）、建物跡や付随施設などが検出された（図3）。道路遺構は各調査区で検出され、SF-1～4・6とした。主要な道路の全幅はSF-1が3.2 m、SF-3が6.0 m、SF-6が3.8 mである。SF-6は南から北へ延びSF-1と接してT字路を形成する。いずれの道路も近世から戦後の区画整理直前まで、位置や規模に大きな変化はみられない。しかし昭和前期に大規模なインフラ整備が実施されており、SF-1～3・6では陶器製（常滑焼）の下水管がほぼ全域に埋設され、近世面を貫通して下層（一部は弥生時代遺構面）まで攪乱を受けていた。

道路遺構の方向性は、南北方向のSF-6以外は東西、南北軸から斜行している。道路面について遺存部分から状況を推測すると、SF-6などはほぼ平坦であるが、SF-1は路面中央部が高く、緩やかな蒲鋒状の横断面形をもつ未舗装道である。道路面は非常に細かい砂質土で構成され、一部に轍の痕跡がみられた。SF-1の北辺だけに側溝が存在し、素掘り溝の両側に横板材を張り、縦杭を要所に打設して固定する構造であった。底板は伴っていない。

道路遺構を除く区域が当時の町割の屋敷地にあたと考えられ、全調査区で建物跡、井戸などが検出された。こうした屋敷地のベースは土盛や石列などで嵩上げされて道路面よりも地盤がやや高い。建物跡の礎石自体は転用などで抜き取られ遺存例は少ないが、柱の基礎構造から確認できた。礎石の設置方法は、土坑を掘削した後に石材を充填して根固めとし、その上に礎石を乗せる方法が一般的であるが、その他にも木杭の利用など幾つかのパターンが確認された。建物の方向性は道路の方向とほぼ一致する。敷地の生活面は江戸時代を通じ複数回にわたって嵩上げされており、土塀の基礎石列や側溝で屋敷地の境界が判明する例もあった。屋敷地内は比較的小規模な建物が多いが、第13次調査区の西端部では結晶片岩の大型石材が多用された建物跡があり、他の屋敷地の建物と比較して異質である。

屋敷地内および道路内では、おびただしい数の大小の土坑が検出された。これらの多くは粘土採掘坑などと考えられ、長期間にわたって高密度で掘り返しと埋め戻しが繰り返されている。土坑の埋土からは多量の遺物が出土した。遺物の内訳は鍛冶工関連（鉄滓、フイゴの羽口、鋳型等）、食器類（陶磁器、漆器碗等）、食物残滓（貝殻、獣骨等）のほか、建築構造



図3 第1面検出遺構概略図（江戸時代後期～末期）

物に由来する瓦片などである。掘削した土坑は最終的に産業廃棄物、生活廃棄物の処分に利用されたようである。その検出位置をみると第3-1面では屋敷地内、第1面では道路内が主体で、掘削場所が時期によって変遷する傾向が窺えた。また出土遺物量は、時期が下るにつれて増加する。このような様相は、人口の増加に伴う町屋の発達、産業の発展、ひいてはゴミ処理問題など、さまざまな社会背景を間接的に示している。

(2) 第3-2面 (戦国時代末期)

第8・11次調査では江戸時代の屋敷地の下層で人工的な堀跡 (NR-1) を検出した (図4)。検出面の標高は約2.6 mである。NR-1は南北約16 mの幅があり、検出全長は東西約80 mである。NR-1はSF-1の北辺に沿って東西の軸線から西がやや北へ振りながら延びるが、調査区の西端付近では方向が東西軸に沿ってくる。堀の南北の肩部はともに急角度で掘り込まれ、南側では幅数mの平坦面を介して二段掘りとなっている。検出面から堀底面までの深度は約3 mである。NR-1の下層堆積土は有機物に富んでおり、泥のような状態で滞水していたと考えられる。また南側の肩部付近には葦茎の痕跡がみられ、ある段階で堀が湿地のような状態であったことを示す。また下層堆積土の一部を含め、堀の北側肩部から南に向かって傾斜する細かいブロック混じりの土砂が厚く堆積し、その状況から人為的に埋め戻された層位であることは明らかであった。その上層には部分的な細砂層を介し、最上層は江戸時代屋敷地のベースとなる整地層が形成されていた。

NR-1の埋土からは中国製陶磁器の染付や白磁、国産陶器の備前焼、瀬戸・美濃系の焼き物などの土器類、中世末期の瓦類、建築部材、木櫛、漆椀、曲物容器、箸など木器・木製品のほか、鎧小札、火縄銃の鉛弾丸、小刀の切羽など武具・武器類の一部、人骨、獣骨、人歯、貝殻などが出土した。遺物の示す時代相は16～17世紀初頭である。

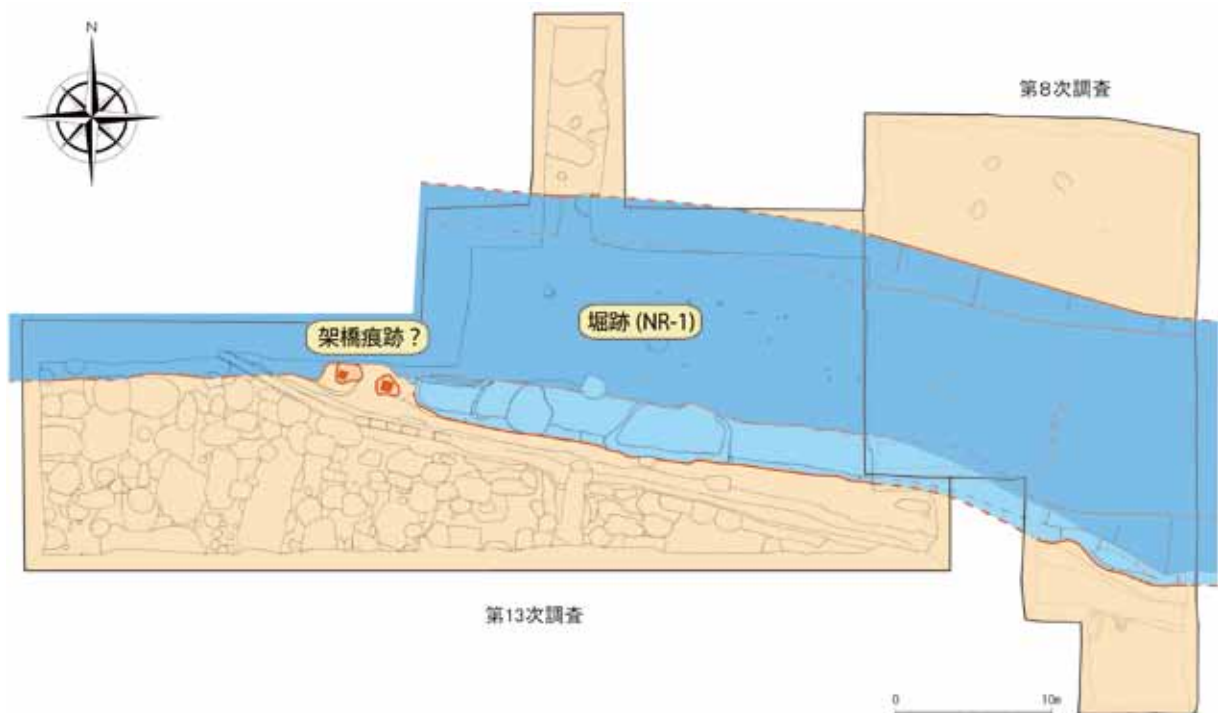


図4 第3-2面 NR-1 概略図 (戦国時代末期)

2. 道路・町割の比定

城下町の先行研究をもとに本願寺鷺森別院を中心とした19世紀前半から戦前までの町割模式図を図5に示す。調査地の旧町名は鷺ノ森南ノ丁、曲尺丁、元博勞町一丁目、六軒丁にあたる。SF-1が西の元博勞町から東の専光寺に至る参道、SF-6が和歌山城の北外堀の中橋に通じる中橋筋の北詰、SF-3が別院の裏門道路、SF-2が別院の外周道路に比定される。また13次調査の西端で検出された大型石材を使用した屋敷地は、真言宗正寿院跡地と推定される。



図5 鷺森寺内周辺の町割模式図（江戸時代後期以後）

3. 鷺森御坊と本願寺鷺森別院成立の経緯

調査地の北に位置する浄土真宗本願寺鷺森別院は、本来は雑賀御坊と称した。鷺森御坊の名称は天正8（1580）年が初見である。文明年間（1469～1487）、紀州門徒によって名草郡清水浦（海南市冷水）に開かれた清水道場が鷺森御坊の起源で、その後、名草郡黒江（海南市黒江）、弥勒寺山（和歌山市秋葉町）へと移転を続け、現在地には永禄6（1563）年に移転した。元亀元（1570）年に石山合戦が開始され、鷺森御坊の中心勢力であった雑賀衆は、本願寺第十一代門主顕如が籠城する大坂本願寺と通じ、天正2（1574）年に紀州本願寺勢力の軍事拠点として御坊の整備強化を実施した。天正8（1580）年、和議により石山合戦が終結し、鷺森御坊に退去した顕如はここに本山を置いて鷺森本願寺が成立した。本山はその後、泉州貝塚、大坂天満など徐々に北へ移転し、鷺森本願寺は別院を名乗ることとなった。

4 鷺森寺内と和歌山城下町割計画

慶長5（1600）年、和歌山藩初代藩主の浅野幸長入城以後、城下町の整備が積極的に推進された。和歌山城の北方から紀ノ川に至る地域一帯は、整然とした東西、南北基線の格子状街路によって区画される。鷺森御坊では伽藍を土堀で囲った境内を中心として四周に寺内が形成されていた。寺内は東西106間、南北133間（約200×250m）の不整形な方形で、城下町割の東西街路に対して15°前後、西が北に振る。また本堂は南面せず東を正面とする。

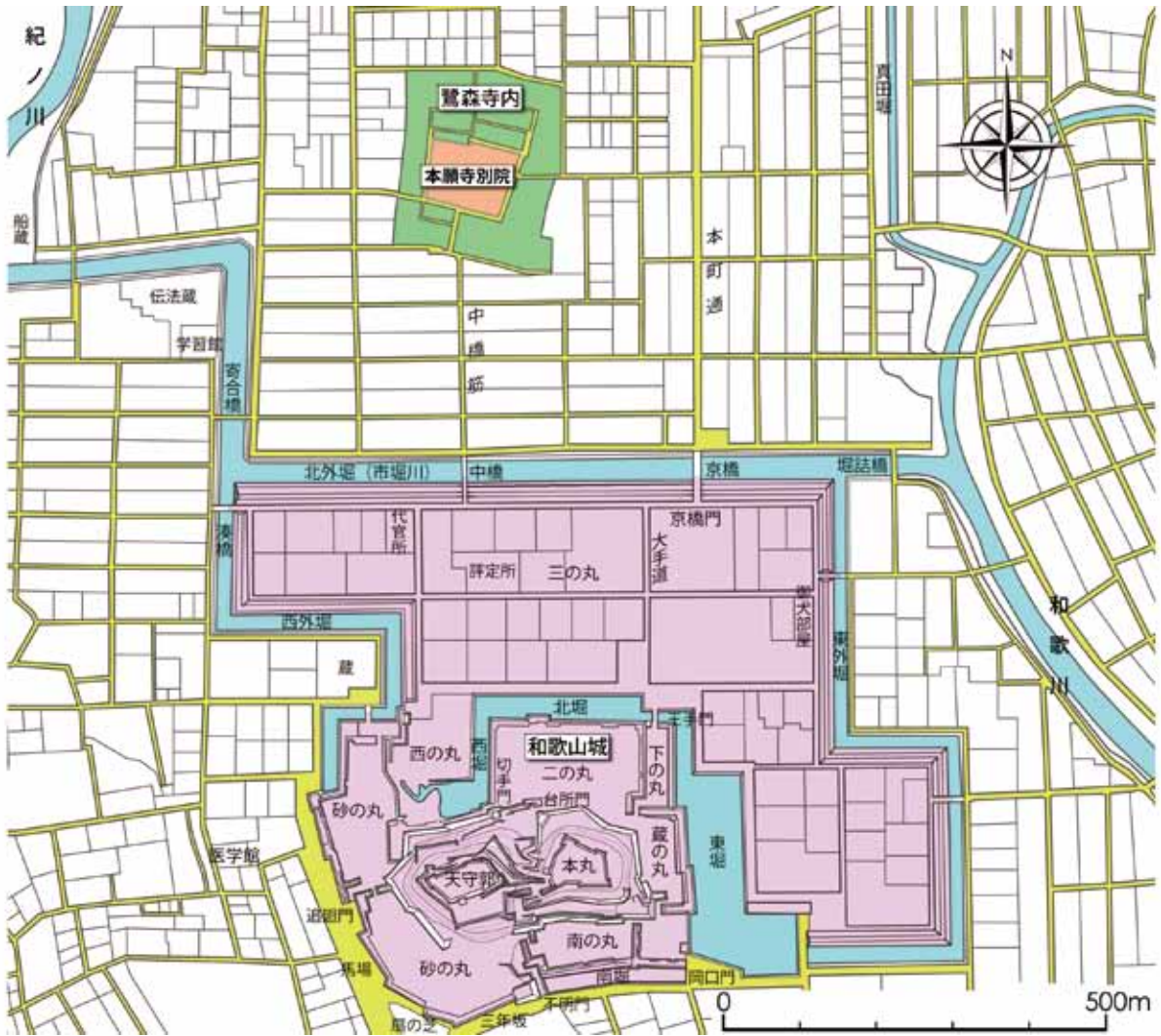


図6 和歌山城下町割の中の鷺森寺内（江戸時代末期）

こうした地割計画は城下町の設計の中でも異質であり、17世紀以降の城下町計画が鷺森寺内の既存の町割（16世紀後半）を包摂するように実施されたことを示している。

NR-1の状況と年代は、鷺森御坊の「惣外堀」が元和年間（1615～1624）に埋め戻されたという『鷺森神社記』（享保8：1723）の記録と一致する。御坊が成立した戦国末期には、山城ほか各地で多数の城郭が築造され、大坂本願寺も寺内町自体が要塞化していた。鷺森御坊の堀NR-1の全幅は、同時期の城砦の堀と比較しても最大級の規模で、往時はおそらく堀と土塁で寺内の四周を画し、城砦に準ずる堅固な防御態勢が整えられていたと考えられる。

鷺森寺内が城下町に中世の地割を残すことは従前からの指摘にある。しかし鷺ノ森遺跡の調査を通じ、その地割が軍事用の堀に由来することが判明し、中世から近世への端境期における寺院武装の実態と、城下町形成の歴史的な経緯を考える上で新たな知見が加わった。

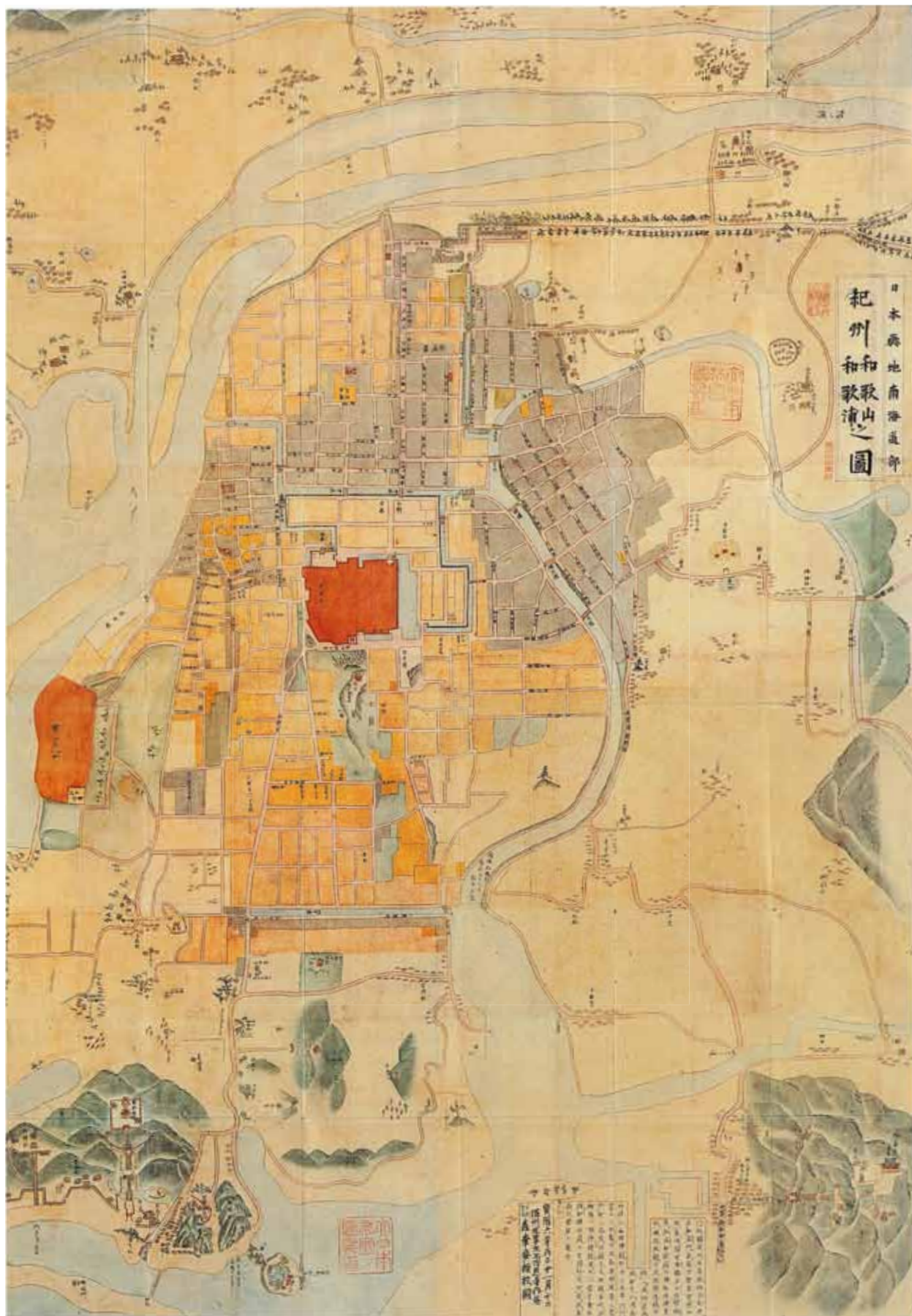
主要参考文献

- 「鷺森本願寺の歴史と寺宝」和歌山市立博物館 1990
- 三尾功「城下町和歌山の鷺森御坊免許地」『城下町和歌山夜ばなし』2011
- 水田義一「城下町和歌山の街路パターン」『きのくに文化財』46 和歌山県文化財研究会 2013



和歌山県立図書館蔵

和歌山古屋敷絵図 万治元年～寛文元年 (1658～1661)



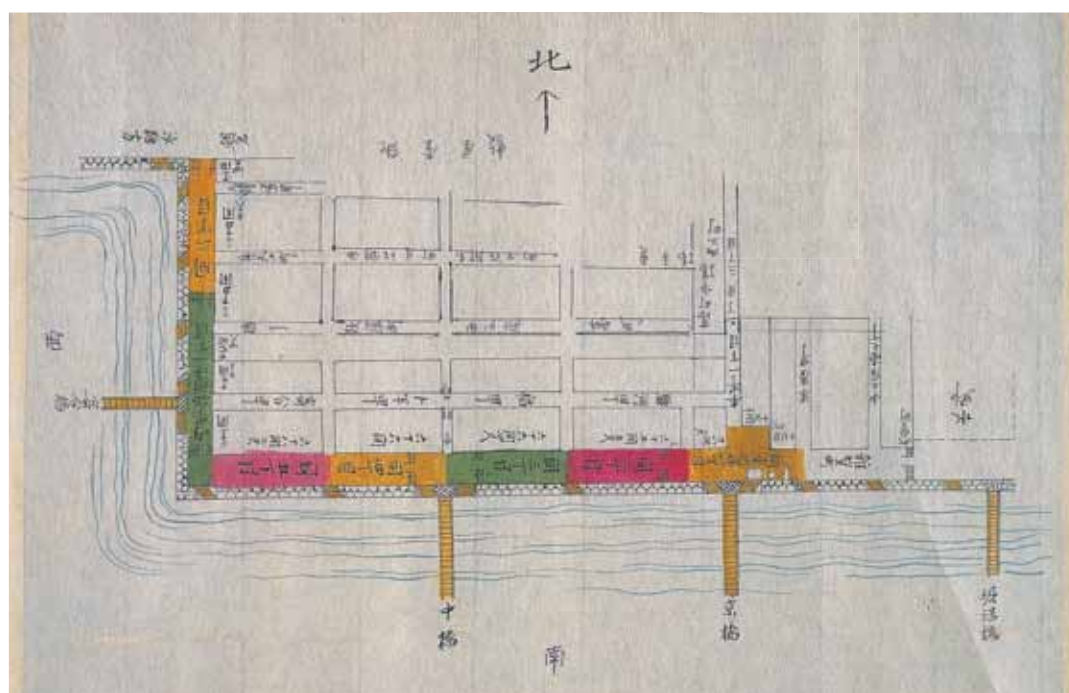
国立公文書館 蔵

日本輿地南海道部 紀州和歌山和歌浦之図 宝曆6年（1756）



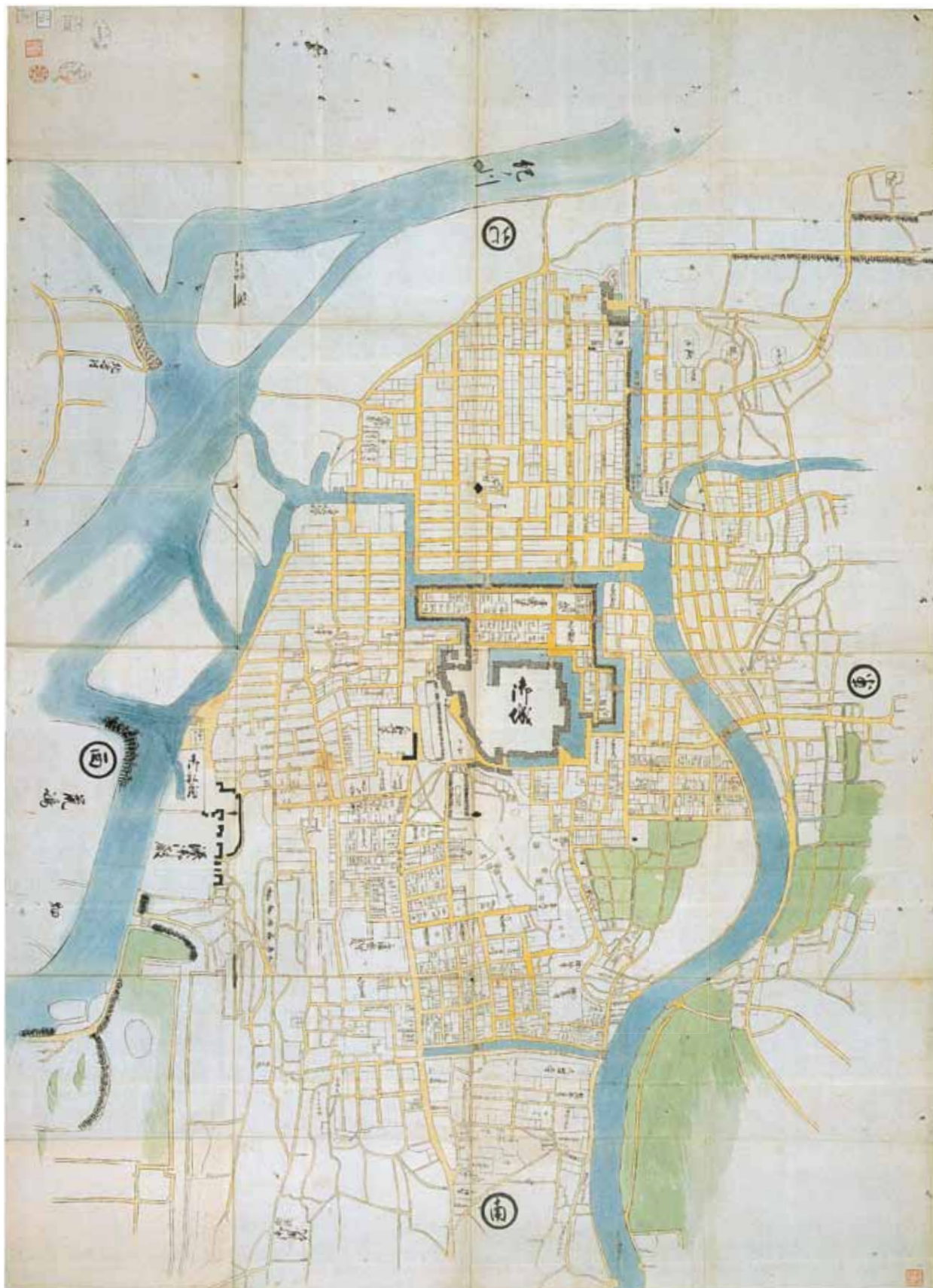
和歌山県立図書館蔵

和歌山城下屋敷大絵図 宝永6年～正徳4年（1709～1714）



和歌山市立博物館蔵

此度丁名相増又者相改候略図 文政13年（1830）



和歌山県立図書館 蔵

若山御城下図 天保7~12年 (1836~1841)



和歌山市立博物館 蔵

和歌山城下町絵図 野際蔡真画 安政2年(1855)



和歌山市立博物館 蔵

和歌山屋敷絵図 文久3年(1863)

公開シンポジウム **和歌山城と城下町の風景**
資 料 集

発行日：平成 27 年 3 月 8 日

発 行：公益財団法人和歌山県文化財センター
〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263-1
TEL：073-472-3710 FAX：073-474-2270
URL：<http://www.wabunse.or.jp>

印 刷：白光印刷株式会社



和歌山市立博物館蔵



日時：平成27年 3月8日(日) 10:30～16:30

会場：イオンモール和歌山 3F イオンホール

後援：和歌山県教育委員会 和歌山市教育委員会
公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団
一般社団法人和歌山県文化財研究会

主催：公益財団法人和歌山県文化財センター